

# チベット訳『梵天所問経』-和訳と訳注(1)

五島清隆

## 1 はじめに

チベット訳『梵天所問経』(全6巻)については、すでに、昭和54年度修士論文として、チベット訳・漢訳の資料、本経を引用する諸文献、成立年代、他の大乘経典との関係、その内容と思想的意義等について、北京版(P)とデルゲ版(D)とを校合した校訂テキストとともに、発表している<sup>(1)</sup>。

このうち、テキストについては、第1章に関して、ナルタン版(N)・チョーネ版(C)・ラサ版(H)、さらに河口慧海将来写本大蔵経(K)を加えた全6種を校合した校訂テキストを私家版で公表した(五島[1981])。

チベット訳・漢訳の資料については、写本系大蔵経が版本5種(CDHNP)と比べると漢訳に近いことを、Kとトク・パレス(T)の2写本を比較して示し(五島[1985])、さらに、パタン(B)・プタク(Ph)・ロンドン大英図書館所蔵のシェルカル・カンジュール(L)を加えた5写本を用いて、大乘経典のチベット訳校訂テキストの作成には写本大蔵経とりわけBとPhとが重要であることを示した(五島[2003])。

さらに、本経を引用する諸文献、本経の成立年代やその内容等について、修士論文の中核部分を「解題」として公表し(五島[1989]<sup>(2)</sup>)、また、その思想的な意義については、別に小論考(五島[1997])を公表している。

現在、今までの研究の集大成として、5種の版本と5種の写本をもとにしたチベット訳校訂テキストとその現代語訳を準備しているが、今回公表するのは、そのうちの、第1章の和訳と訳注である。

訳出にあたって使用したのは以下の資料である<sup>(3)</sup>。

---

(1) 「“Brahmaviśeṣacintipariṣṭhā” について」(京都大学大学院文学研究科修士課程, 1980年1月提出)。

(2) これは、それ以前に発表した「解題」(『密教文化』#161, 1988年, 49-62頁)の誤植を訂正した上で一部に補訂を加えたものである。この「解題」発表後の資料としては、羅什訳『思益梵天所問経』の国訳(河村[1993])がある。

(3) Nは、大蔵経の版全体としては Them spangs ma 系と Tshal pa 系の混交が見られるが、各経典ごとでは、いず

## [チベット訳]

## 写本大蔵経

## 1 単行の大蔵経

|                         |        |         |   |
|-------------------------|--------|---------|---|
| B: Batang MS Kanjur     |        | mDo-sde | Tsa 26a3-31b9, 33a1-84b9,<br>185a1-189a2 <sup>(4)</sup> |
| Ph: Phug brag MS Kanjur | No.160 | mDo-sde | Tsha 350b5-370αβγ<br>-459a6                             |

## 2 Them spangs ma 系の大蔵経

|                          |        |         |                  |
|--------------------------|--------|---------|------------------|
| K: Kawaguchi MS Kanjur   | No.165 | mDo-sde | Tsha 133b2-230a6 |
| L: London MS Kanjur      | No.119 | mDo     | Tsha 137a8-235a4 |
| T: sTog Palace MS Kanjur | No.164 | mDo-sde | Tsha 155b2-269b6 |

## 版本大蔵経

## 3 Tshal pa 系の大蔵経

|                             |        |                |                |
|-----------------------------|--------|----------------|----------------|
| C: Cone(Co ne) ed.          | No.800 | mDo-mang       | Ba 26b4-121b8  |
| N: Narthang(sNar thang) ed. | No.146 | mDo            | Pa 35a8-162b4  |
| P: Peking ed.               | No.827 | mDo-sna-tshogs | Phu 23b1-106a1 |

## 4 混交が見られる大蔵経

|                       |        |         |               |
|-----------------------|--------|---------|---------------|
| D: Derge(sDe dge) ed. | No.160 | mDo-sde | Ba 23a1-100b7 |
| H: lHa sa ed.         | No.161 | mDo-sde | Pa 34b8-159a7 |

## [漢訳]

|                    |                     |                                 |
|--------------------|---------------------|---------------------------------|
| Ch1: 持心梵天所問経 (4巻)  | 竺法護訳 (286年)         | Taisho Vol.15<br>No.585 1a-33a  |
| Ch2: 思益梵天所問経 (4巻)  | 鳩摩羅什訳 (402年)        | Taisho Vol.15<br>No.586 33a-62a |
| Ch3: 勝思惟梵天所問経 (6巻) | 菩提流支訳 (518 or 536年) | Taisho Vol.15<br>No.587 62a-96a |

将来発表する校訂版との対照を容易にするため、北京版の丁数を例えば [P 23b] のようにして訳文の中に示しておいた。また、訳文中に参考として挙げる対応 Skt のほとんどは Tib から想定されたものなので、たとえば (\*pratibhāna) のように、\*印を付けて示したが、その名が広く定着している固有名詞や引用文献に対応 Skt が見出されるものについてはそのまま示すこととした。

訳注では、上記各資料間の異同を示したほか、大乘経典に共通の定型的表現についてはそのサ

---

れかの系統で統一されている。本経の場合、Tshal pa 系に属する。なお、写本大蔵経については、五島 [2002]2-6 頁参照。

(4) 丁数が飛んでいるように見えるが、これは数字だけの問題で、内容的な欠落はまったく見られない。

ンスクリット (Skt) を挙げ、論書などの他文献に引用される箇所については引用文献の Skt, チベット訳 (Tib), 漢訳 (Ch) を挙げた。また、語句の意味を確定するに有用と思われる場合は、辞書や索引を参照し、さらに大乘経典や仏伝の中からできるだけ多く参考になる箇所を挙げ、正確な理解を期した。なお、Skt の引用に際しては、例えば、固有名詞 (大文字の使用) や句読の表記などに関して、原則として、準拠したテキストの方式に従った。また、脚注の番号が指示する範囲が長い場合、その範囲が明確になるよう、始まりの箇所に、(5)... のような記号を入れたが、この番号は、当該範囲の最後に来るべき番号で示される。訳文中における [ ] は語句の補充、( ) は語句の説明、[ ] は当該部分が漢訳にのみ存在することを示している。

## 2 和訳と訳注

[P 23b] インド語で, *Ārya-<sup>(5)</sup>...brahma-viśeṣa-cinti-paripṛcchā...<sup>(5)</sup>-nāma-mahāyāna-sūtra* チベット語では、「ブラフマー神 (梵天) であるヴィシエーシャチンティン (*Viśeṣacintin* 優れた考えを持つ者)<sup>(6)</sup>による質問」と名づけられる、聖なる大乘経典

### 第一巻

すべての仏陀と菩薩とに礼拝したてまつる。

#### (I-1)

次のように私は聞いた。あるとき<sup>(7)</sup>、世尊は、ラージャグリハ市 (王舎城) のカラランダカニヴァーバ竹林において、六万四千の比丘からなる比丘の大集団と七万二千の菩薩たちとともにおられた<sup>(8)</sup>。[それらの菩薩たちは] すべてみな、すぐれた知の所有者として世に知られ

<sup>(5)</sup> BLKPhT : *viśeṣacinti-brahma-paripṛcchā*. CDHNP: *brahma-viśeṣacinti-paripṛcchā*.

<sup>(6)</sup> T: *khyad par sems*. Ch1:持心. Ch2:思益. Ch3:勝思惟. この菩薩の名の由来や関係する経典に関しては五島 [1988] 参照. なお, Ch1 の「持心」は本来「特心」とあるべきもの.

<sup>(7)</sup> Tib は全ての版で *'di skad bdag gis thos pa dus gcig na /* (次のように私は聞いた, ある時に.) とする. これは漢訳の「如是我聞一時」と同じく, インド語原典の語順のままに直訳したからだと思われる. それは, インドにおいて冒頭に置かれるこの一節が当該経典が聖典であることの証拠あるいは刻印と見なされていたからであろう. 経典冒頭に置かれるこの定型句 *evaṃ mayā śrutam ekasmin samaye bhagavān ...* (如是我聞一時世尊...) において, *ekasmin samaye* (一時) が前に懸かるか後に懸かるかに関して翻訳者・研究者の間で解釈が分かれている. この問題をめぐる研究史については五島 [2001]18 頁注 2, 船山 [2007] 参照.

<sup>(8)</sup> Tib を正確に訳したものであるが, たとえば『迦葉品』冒頭の *...bhagavāṃn rājagṛhe viharati sma grddhakūṭe parvate mahatā bhikṣusamghena sārddham aṣṭābhir bhikṣusahasraiḥ ṣoḍaśabhiś ca bodhisatvasahasraiḥ ...* (KP §1) を参考にすれば, ここも本来は「六万四千の比丘と七万二千の菩薩からなる大比丘団とともにおられた」であった可能性がある. たとえば Ch1 は「與大比丘衆俱, 比丘六萬四千菩薩七萬二千」とする. 詳しくは五島 [2001]19 頁注 4 参照.

(\*abhijñābhijñāta), 陀羅尼を得て、その説法へのひらめき (弁才 \*pratibhāna) は無礙であり、三昧を得ており、すぐれた知によって思いのままに活動 (神通遊戯 \*abhijñāvīkrīḍita) し、畏れることのない説法へのひらめきを有し、あらゆる存在 (法) の自性を教示することに巧みであり、存在 (法) が [本来] 不生であることを容認する知 (無生法忍) を得ており、具体的には、(1) マンジュシュリー (Mañjuśrī 文殊師利) 法王子<sup>(9)</sup>, (2) ラトナパーニ (Ratnapāṇi 宝を手にした者) 法王子, (3) ラトナムドラーハスタ (Ratnamudrāhastā 手に宝印のある者) 法王子, (4) ラトナシュリー (Ratnaśrī 宝の富) 法王子, (5) ガガナガンジャ (Gaganagañja 天空を蔵とする者) 法王子, (6) サハチッタウトパーダダルマチャクラヴァルタナ (Sahacittotpādadharmacakravartana 心を起こすやいなや法輪を転じる) 法王子, (7) ジャーリニープラバ (Jalinīprabha 縵網より光明を発する者)<sup>(10)</sup>法王子, (8) ヴィジュリンビタ (Vijṛmbhita [獅子のように] 奮い立った者)<sup>(11)</sup>法王子, (9) シュリーガルバ (Śrīgarbha 吉祥を内に蔵する者) 法王子, (10) サルヴァスヴァパリトヤーガ (Sarvasvaparityāga あらゆる所有物を喜捨する者) 法王子, (11) パドマヴィユウハ (Padmavyūha 紅蓮で飾られた者) 法王子, (12) シンハ (Siṃha 師子) 法王子, (13) チャンドラプラバ (Candraprabha 月光) 法王子, (14) ソーマラシュミ (Somaraśmi 月明) 法王子, (15) スマティ (Sumati 知恵のすぐれた者) 法王子, (16) サルヴァーランカーラヴィユウハ (Sarvālaṃkāravīyūha あらゆる飾りで飾られた者) 法王子である。[さらに] バドラパーラ (Bhadrapāla すぐれた守護者) を始めとする十六人の正しき人々<sup>(12)</sup>がいた。すなわち、(1) バドラパーラ, (2) ラトナーカラ (Ratnākara 宝の鉱脈), (3) スサールタハヴァーハ (Susārvahā 隊商の良きリーダー), (4) ナラダッタ (Naradatta 人類の祖ナラによって授けられた者)<sup>(13)</sup>, (5) グハグプタ (Guhagupta グハ神によって守られた者), (6) ヴァルナダッタ (Varuṇadatta ヴァルナ神によって授けられた者), (7) インドラダッタ (Indradatta インドラ神によって授けられた者), (8) ウッタラマティ (Uttaramati 最上の知恵のある者), (9) ヴィシェーシャマティ (Viśeṣamati すぐれた知恵のある者), (10) ヴァルダマーナマティ (Vardhamānamati 増大する知恵のある者), (11) アモーガダルシン (Amoghadarśin 実りある見解を持つ者), (12) スサンプラストヒタ (Susamprasthita 立派に出発した者<sup>(14)</sup>), (13) スヴィクラーンタヴィクラミン (Suvikrāntavikrāmin きわめて勇敢な勇者の歩みをする者), (14) アナンタマティ

(9) 「文殊師利」および「法王子 (Skt:kumārabhūta)」については平川 [1995] 参照。

(10) T: dra ba can gyi 'od. Ch1:明網. Ch2,3:網明. この菩薩の名の由来や関係する經典に関しては五島 [1988] 参照。

(11) vijṛmbhita の語義については、梶山 [1994]428-9 頁注6 参照。

(12) 「法王子」が出家の菩薩であるのに対して、「十六人の正しき人々 (satpuruṣa)」は在家の菩薩を指す。satpuruṣa については渡辺 [1981], Harrison[1990] pp.6-8, f.n.7 が詳しい。なお、この satpuruṣa に関しては、比丘の備えるべき7つの特性とされる「七善士法 (saptasatpuruṣadharmā)」の考察が不可欠と思われる。五島 [2001]33-34 頁注58 参照。

(13) LKT: mis byin (Skt: naradatta). B: mis sbyin, Ph: mis min. CDHNP mes byin (Skt: agnidatta). Ch3: 人徳 (Skt: naradatta). Ch1,2 はこの語を欠く。

(14) Cf. samprasthita: set out on a journey, departed (MW); set out for (MDP).

(Anantamati 限りない知恵を持つ者)<sup>(15)</sup>, (14') アニクシプタドゥラ (Anikṣiptadhura 重荷を捨てない者)<sup>(16)</sup>, (15) スールヤガルバ (Sūryagarbha 太陽を内に蔵する者), [P 24a] (16) ダラニンダラ (Dharaṇīṃdhara 大地を支える者) であり, 以上のごときを始めとする七万二千の菩薩たちがいた. また, [六欲天の神々としては] 四大〔天〕王・神々の主であるシャクラ (天帝釈) を始めとする三十三天・夜摩天<sup>(17)</sup>・兜率天・樂變化天・他化自在天の神々, [色界初禪の神々としては, シキンという名のサハー世界の主たる] ブラフマー神 (大梵天) を始めとする百・千の梵天の神々, さらにそのほかに, 偉大な威徳をそなえた神々, ナーガ (龍), ヤクシャ (夜叉), ガンダルヴァ (乾闥婆), アスラ (阿修羅), ガルダ, キンナラ, マホーラガ, 人間 (人) や人間でないもの (非人)<sup>(18)</sup>たちが一緒であった. さて, 世尊は, 百・千もの多くのとりまきに囲まれ, 尊敬されて, 法をお説きになっておられた.

## (I-2)

そのとき, 法王子であるジャーリニープラバ菩薩は, [座から立ち上がり]<sup>(19)</sup> 一方の肩に上着をかけ (偏袒右肩), 右の膝を地面につけ, 世尊のほうに向かって合掌し, 三千大千世界を震動させ, <sup>(20)</sup>… 三千大千世界のすべての人々を観察してから …<sup>(20)</sup>, 世尊にこう申し上げた.

<sup>(21)</sup>… 「もし世尊が, [私が] おうかがいした質問に答えて下さることをお認め下さいますならば, 私は, 正しい悟りを得られた尊敬すべき如来に [P 24b] すこしばかりお尋ねしたいと存じます」

[ジャーリニープラバ菩薩が] このように申し上げると, 世尊は, ジャーリニープラバ菩薩に つぎのように仰せになった.

「ジャーリニープラバよ, おまえが欲することを, なんでもよいから, 如来に質問しなさい. 尋ねられたそのひとつひとつに答えることによって, 私はおまえの心をよろこばしてあげよう」…<sup>(21)</sup>

<sup>(15)</sup> Tib: blo gros mtha' yas pa (Skt: anantamati). Ch1:不損意. Ch2:不少意. Ch3:無量意. 『法華経』が挙げる 14 番目の菩薩名である Anupamamati (Tib: dpe med blo gros) に対応する.

<sup>(16)</sup> 蔵訳・漢訳のすべての伝本にあるが、『法華経』(SP 3.5) に見られるように, Anikṣiptadhura(不休息) は「十六正士」ではなく, それ以外の (おそらく出家の) 菩薩の名前である. なお, dhura は本来「軛 (yoke)」の意.

<sup>(17)</sup> Tib: mtshe ma (Skt: yamala, twin, one of a couple (AD)). Ch1:焰天. Ch2,3:夜摩天. 「夜摩天 (yāma)」の対応チベット語は一般には, 'thab bral が用いられる. Cf. *Mvy* 3080: yāmāḥ, 'thab bral, 焰摩天.

<sup>(18)</sup> 「人間でないもの (非人 amanuṣya)」については, 『俱舍論』に「更に, 中劫の終末時には, それら同じ過失によりて, 諸々の非人 (amanuṣya) が, 人寿十年なる人々に悪疫を吐く (ītim utsrjanti)」(AKBh 188.5-6) とあり, ヤショーミトラはその註で「諸々の非人とはピシャーチャ (食肉鬼) 等である (amanuṣyāḥ piśācādayaḥ)」(AKVy 556.25-6) としている.

<sup>(19)</sup> 3 漢訳のみ.

<sup>(20)</sup> Ch1:普雨雜華散衆會上. Ch2:引導起發一切大衆.

<sup>(21)</sup> 経典に見られる定型的表現. 例えば, 『善勇猛般若経』には次のようにある.

「もし世尊が, [私に] 尋ねられて, [その] 質問に答えて下さることをお認め下さいますならば, 私は, 正しい悟りを

## (I-3)

〔世尊が〕このように仰せになると、ジャーリニープラバ菩薩は、[心おおいによるこぼせ]<sup>(22)</sup>、世尊にこう申し上げた。

「世尊の身体は、見た者が飽きることのない色をしており、百・千・コーティ・ナユタもの太陽〔の光〕を越えています。世尊よ、私は、如来の身体を見たり考えたりすることのできる人はすばらしい（希有）、と考えます。世尊よ、私はまた、如来の身体を見たり考えたりすることはすべて仏陀の威神力だ、と考えます」

## (I-4)

世尊が仰せになる。

「ジャーリニープラバよ、[おまえの]言う通りだ。如来が承諾する<sup>(23)</sup>ことがなければ、如来の身体を見たり考えたりすることはできない。[また、如来に質問することもできない。]<sup>(24)</sup>それはなぜかという、ジャーリニープラバよ、如来には、(1)「平静な状態に整える(\*praśamavyavasthāna)」という名の光があり、この光に触れた人々は、如来の身体を見、考えたとしても、彼らの眼の器官（眼根）が破壊されることはないからである。

ジャーリニープラバよ、如来には、(2)「無畏の弁才」という名の光がある。この光に触れた人々は、<sup>(26)</sup>…如来に向かって質問をし、さらに質問をする<sup>(25)</sup>。…<sup>(26)</sup>

ジャーリニープラバよ、如来には、(3)「善根の集積」という名の光がある。この光に触れた

---

得られた尊敬すべき如来にすこしばかりお尋ねしたいと存じます」[スヴィクラータヴィクラミンが]このように申し上げると、世尊は、スヴィクラータヴィクラミンにつきのように仰せになった。「スヴィクラータヴィクラミンよ、おまえは、正しい悟りを得られた尊敬すべき如来に質問しなさい。おまえが欲することはどのようなことも、そのひとつひとつに対して質問に答えることによって、私はおまえの心をよろこばせてあげよう」

“Pṛccheyam ahaṃ Bhagavantaṃ tathāgatam arhantaṃ samyaksambuddhaṃ kaṃcid eva pradeśaṃ, saced Bhagavān avakāśaṃ kuryāt pṛṣṭāś ca praśnavyākaraṇāya.” Evam ukte Bhagavān Suvikrāntavikrāmiṇaṃ bodhisatvaṃ mahāsattvaṃ etad avocāt: “Pṛccha tvaṃ Suvikrāntavikrāmiṇ-s -Tathāgatam arhantaṃ samyaksambuddhaṃ, yad yad evākāṃkṣaṣy, ahaṃ te tasya tasyaiva praśnavyākaraṇena cittam ārādhayiṣyāmi.” (Su 3.12-18)

(22) Ch2,3 のみ。

(23) Tib: skabs phye ba (Skt: avakāśaṃ karoti). Ch2,3:加威神。

(24) 3 漢訳のみ。

(25) Ch1:問如来諮難所趣。Ch2,3:能問如来其辯無盡。

(26) [引用]『大智度論』

如持心經說。佛光明入身中能問佛事。( Taisho vol.25 524a24-25 )

如持心經說。以光明威神入其身故。能於佛前難問有諸說。( Taisho vol.25 604a23-25 )

人々は、転輪聖王の王位を獲得するために、如来に質問する。

以下同様にして、[P 25a] (4)「清浄な<sup>(27)</sup>状態に整える」という光があり、この光に触れた人々は、シャクラ神〔の位〕を獲得するために、如来に質問する。

(5)「自在さを獲得する」という光があり、この光に触れた人々は、ブラフマー神（梵天）の世界に生まれるために、如来に質問する。

(6)「煩惱がなくなる」という光があり、この光に触れた人々は、声聞乗について如来に質問する。

(7)「ひたすら〔世俗から〕離れる<sup>(28)</sup>」という光があり、この光に触れた人々は、独覚乗について如来に質問する。

(8)「一切知者の知において灌頂を受ける<sup>(29)</sup>」という光があり、この光に触れた人々は、仏乗である大乘について如来に質問する。

(9)<sup>(31)</sup>…「すぐれたところへ赴く<sup>(30)</sup>」という光があり、この光が、こちらに来られたりあちらに行かれたりする如来の足のうらから〔発して〕人々に触れるとき、それらの人々は、死ぬとすぐに良い生存状態（善趣）である天界に生まれる。…<sup>(31)</sup>

(10)「あらゆる装飾で飾り立てられた」という光は、如来が町に入るときに放たれる。その時、如来のその光が、ある人に触れると、触れられた人々はすべて最上の幸せを得、またその町には、あらゆる装飾による飾りつけが生じるであろう<sup>(32)</sup>。

(11)「散乱させる<sup>(33)</sup>」という光によって、如来は、無量無辺の世界を震動させる。

(12)「安樂を教示する」という光によって、〔如来は〕地獄にいる人々の地獄の苦しみをなくす。

(13)「慈しみの心によってすぐれている」という光によって、畜生 [P 25b] に生まれた人々が互いに食い合うことがないようにする。

(14)「爽快にする」という光によって、ヤマの世界にいる人々（餓鬼）のヤマ世界の〔飢渴の〕苦しみをなくす。

(15)「汚れのない」という光によって、目の見えない人々は視覚を得るであろう。

(16)「聴覚が順調な」という光によって、耳の聞こえない人々は聴覚を得るであろう。

(17)「〔罪惡を〕捨離する」という光によって、十不善業道にいる人々は十善業道を得るであろう。

(27) P: dag pa (Skt: śuddha). BCDHNKLPHT: dge ba (Skt: śubha). Ch1:清淨了. Ch2,3:淨莊嚴.

(28) Tib: rtse gcig pa dben pa dang ldan pa. Ch1:專一遵澹行泊. Ch2,3:善遠離.

(29) Ch1:一切慧持讚容. Ch2:益一切智. Ch3:益一切智智.

(30) Ch1:樂持異歩. Ch2:往益. Ch3:住益. Ch1の「持異」はTib: khyad par (Skt: viśeṣa) に相当するので、「特異」とあるべきところ.

(31) [引用]『大智度論』

如網明菩薩經中說。有人見佛光明得道者生天者。(Taisho vol.25 227b4-5)

(32) Ch2のみ「城中寶藏從地踊出」という一文を加える.

(33) Tib: rnam par 'thor ba (Skt: vikṣepa). Ch1:壞除. Ch2:震動. Ch3:分散.

- (18) 「[自分の罪を] 恥じる (慚)」という光によって、心乱れた人々は正念を得るであろう。
- (19) 「消滅する」という光によって、誤った考え (邪見) を持った人々は正しい考え (正見) を得るであろう。
- (20) 「喜捨する」という光によって、物惜しみをする人々は布施 [の心] を得るであろう。
- (21) 「[火に焼かれるような] 苦しみが無い」という光によって、行いのよくない (\*kuśīla) 人々は持戒 [の心] を得るであろう。
- (22) 「他に恵みを与える (\*anugraha)」という光によって、人を虐待 (\*upaghāta) しようと思っている人々は忍辱と柔和 [の心] を得るであろう。
- (23) 「[燃えるような] 熱意を持つ<sup>(34)</sup>」という光によって、怠惰な人々は精進を得るであろう。
- (24) 「[心を] 専一にする」という光によって、正念を失った人々は禪定を得るであろう。
- (25) 「理解する<sup>(35)</sup>」という光によって、愚かな知をもつ人々 (\*dausprajña) は智慧を得るであろう。
- (26) 「汚濁がなく清浄な (\*anāvila)」という光によって、信仰心 (淨信) のない人々は信仰心を得るであろう。
- (27) 「把握する (\*saṃgraha)」という光によって、[教えを] 聞くことの少ない人々は多聞を得るであろう。
- (28) 「威儀を備えた」 [P 26a] という光によって、[自らの罪を] 恥じたり [他に対して] 恥ずかしく思ったりすることのない人々は [自らの] 罪を知り [他に対して] 恥じる心を得るであろう。
- (29) 「[俗世間を] 厭う」という光によって、貪欲なふるまいをする人々は [その] 貪欲 [な心] を打ち砕くであろう。
- (30) 「歓喜」という光によって、怒り (瞋) をもって行動する人々は [その] 怒り [の心] を打ち砕くであろう。
- (31) 「光り輝く」という光によって、愚かな (癡) 行動をする人々は <sup>(36)</sup>… 縁起 [の法則] を理解するであろう …<sup>(36)</sup>。
- (32) 「あまねく行き渡る (遍行 \*sarvatraga)」という光によって、[貪・瞋・癡を] 等分に行う人々<sup>(37)</sup> は [その] 等分の行動を放棄するであろう。

(34) Tib: 'bar ba can. Ch1: 慇懃. Ch2,3: 勤修.

(35) Tib: ye shes. Ch1: 顯曜. Ch2,3: 能解.

(36) Ch1: 除去愚冥. Ch2: 斷除愚癡. Ch3: 觀十二緣斷除愚癡.

(37) Tib: sems can cha mnyam par spyod pa rnam. Ch1: 等分行. Ch2: 等分衆生. Ch3: 等分者. 『悲華經』に次のような「等分」の例がある.

さて、善男子よ、青年たるジュヨーティパーラは、ラトナガルバ如来に対して、右の膝を地に着けて、言った。「大徳・世尊よ、私は、無上正等覺に心を起こします。この仏国土において、心が貪・瞋・痴を分かつち持ち、思いが善・不善に確定していない人々の中で、四万歳の壽命をもった生き物たちの中で、私は無上正等覺を悟りますように」

atha khalu kulaputra Jyotipālo māṇavako Ratnagarbhasya tathāgatasya dakṣiṇaṃ jānumaṇḍalaṃ pṛth[i]vyāṃ pratiṣṭhāpyāha / “utpādayāmy ahaṃ bhagavann anuttarāyāṃ samyaksaṃbodhau cittam / asmin buddhakṣetre <sup>1</sup>…rāgadveṣamohasabhāgacittānām…<sup>1</sup> avyavasthitakuśalākūśalāśayānām



ジャーリニープラバよ、[このように] 如来には、「あらゆるもの（一切色）を教示する」という光があり、この光に触れた人々は、如来の身体を、種々の色、無数の色、百・千・無数〔などといった形容〕をはるかに越えた色をしたものとして見るであろう。

ジャーリニープラバよ、私が、如来の光明に関して一劫あるいは一劫以上<sup>(38)</sup>のあいだ<sup>(39)</sup>…語ったとしても、光明というかたちを取った如来の説法が〔説明され〕尽くすことはないであろう…<sup>(39)</sup>。<sup>(40)</sup>…このように、正しい悟りを得られた尊敬すべき仏陀・如来は、[その] 光明が無量無辺の功德を有しているのである…<sup>(40)</sup>。

## (I-5)

〔世尊が〕このように仰せになると、ジャーリニープラバ菩薩は世尊にこう申し上げた。

「世尊よ、このように、無量のものとして示されたこの如来の身体の莊嚴<sup>(41)</sup>と、思議を越えた巧みな手だて（方便善巧）のある〔光明というかたちを取った〕説法とは、まことに希有なものであります。

世尊よ、これらの光明を私は以前に聞いたことがございませんでした。もし、世尊によって語られたことの意味が私の理解している通りでありますならば、世尊よ、誰であれ、これら [P 26b] の光明の名を聞いて信仰心（浄信）を得た菩薩は、すべて、このような光明によって光り輝いている正しい悟りを得た仏陀の身体<sup>(42)</sup>をもつことでありましょう。

また世尊よ、如来がある光〔を放つこと〕によって他の仏国土にいる菩薩たちを促しますと、

1…sattvānām…<sup>1</sup> catvāriṃśadvarṣasahasrāyūṣkāyām prajāyām anuttarām samyakṣambodhim abhisambudhyeyam” ( *Kṛp* 195.1-7)

1) Tib: sems can 'dod chags dang / zhe sdang dang / gti mug sems cha mnyam pa rnam dang / ( sDe dge ed. Cha 208a2-3 ) Ch: 有衆生三毒等分; 貪欲瞋患愚癡等分心衆生 (Taisho Vol.3 No.157 199c16-17; No.158 261b20-21)

(38) Tib: bskal pa las lhag par (Skt: kalpāvaśeṣam) . Ch1:過劫. Ch2:減一劫. Ch3:餘殘劫.

(39) Tib: bshad kyang de bzhin gshegs pa'i 'od zer gyi rnam pa dang ldan pa'i chos bstan pa yongs su zad par mi 'gyur te. Ch1: 語嗟講說如來光明論闡經法, 不能究盡如來光明光明名號. Ch2: 說此光明力用名號不可窮盡. Ch3: 依如來光明說法不可窮盡.

(40) Ch1,2 はこの部分を欠く.

(41) Tib: sku'i bkod (Skt: kāyavyūha or kāyavyavasthāna). Ch1: 如來之身不可限量巍巍之徳. Ch2: 如來身者即是無量無邊光明之藏. Ch3: 身光莊嚴. kāyavyavasthāna については『三昧王経』に次のような用例がある.

聖なる段階 [のそれぞれ] に応じた、心の安定、専一さ、身体の安定、威儀に住すること、常に [身口意を] 守ること。人中の雄たる牟尼は、[このような] 法をお説きになる。

cittavyavasthāna ekāgratā ca kāyavyavasthāna yathāryabhūmiḥ /

īryāpathastho sada kāli rakṣaṇā deśeti dharmam puruṣarṣabho muniḥ // (SR ch.17 v.78)

(42) BKLT: sku. CDHNP: mthu. Ph: omitted. Ch1,2,3:身.

〔促された菩薩たちは〕ただちにこのサハー世界にやって来、そのうちの質問・応答・解説に通じている菩薩は、やって来てのち、如来に対して質問し、敬意をもって仕え、さらに質問します。そういう「菩薩を促す」という名の光を放射して下さいますようお願い申し上げます」

## (I-6)

さて世尊は、そのとき、無量無辺の世界を照らす、そのような光を身体から放射なされた。菩薩たち<sup>(43)</sup>はその光に促されると、ただちにこのサハー世界にやって来た。

## (I-7)

さて、この仏国土から東方に七十二恒河沙 (\*gaṅgānadivālukāsama) の百倍千倍もの数の仏国土を過ぎたところに、「パリシュッダ (清浄 \*Pariśuddha)」という名の世界があり、そこには、「チャンドラプラバ (月光 \*Candraprabha)」という名の正しい悟りを得られた尊敬すべき仏陀・如来が現におられ、身を保たれ、時を過ごしておられる。<sup>(44)</sup>…ただ菩薩にのみ法を説いている…<sup>(44)</sup>その仏国土には、不退転の菩薩大士である「ヴィシェーシャチンティン」という名のブラフマー神 (梵天) がおり、その光に促されるやいなやただちにチャンドラプラバ如来・世尊のところに参上した。参上して、かの世尊の足に頭をつけて礼拝してのち、かの世尊にこう申し上げた。

(47)…「<sup>(45)</sup>…世尊よ、この大きな輝きが世間に生じた理由 (\*hetupratyaya) は何でございましょう…<sup>(45)</sup>」

かの世尊はこう [P 27a] 仰せになる。

「ブラフマー神よ、この仏国土から西方に七十二恒河沙の百倍千倍もの数の仏国土を過ぎたところに、「サハー (娑婆)」という名の世界があり、そこには、「シャーキャ・ムニ (釈迦族出身の聖者)」という名の正しい悟りを得られた尊敬すべき仏陀・如来が現在におられ、身を保たれ、時を過ごしつつ、法を説いておられる<sup>(46)</sup>。

つまり、かの〔シャーキャ・ムニ〕如来が、十方の菩薩たちを呼び集めんがために、身体からこの光を放たれたのである」

そこで、ブラフマー神であるヴィシェーシャチンティンは、世尊にこう申し上げた。…<sup>(47)</sup>

「世尊よ、かの如来は私に会うことを欲しておられますので、そのサハー世界において、かのシャーキャ・ムニ世尊にお目にかかり、礼拝し、敬意をもって仕え、質問し、さらに質問するた

(43) Ch1:無数億千菩薩. Ch2:無量百千万億菩薩. Ch3:無量菩薩.

(44) Ch1,2はこの部分を欠く.

(45) 経典に見られる定型的表現. Cf. 「世尊よ、〔世尊がいま〕微笑をお現しになられた理由 (因縁) は何でしょうか」 ko bhagavan hetuḥ kaḥ pratyayaḥ smitasya prāduṣkaraṇāya (*Asp* 226.17-18).

(46) 経典に見られる定型的表現. Cf. 「どれだけの間、このパドモータラ如来は、〔蓮華世界に〕おられ、身を保たれ、時を過ごし、法を説かれるのですか」 kiyacciram asau Padmottaras thatāgatas tiṣṭhati dhriyate yāpayati dharmam ca deśayati. (*Krp* 18.1-2)

(47) Ch1,2はこの部分を欠く.

めに、私は行ってまいります」

## (I-8)

かの世尊はこう仰せになられた。

「ブラフマー神よ、いま、かのサハ世界においては、幾コーティもの多くの菩薩が集まってきている。いまこそ〔行くべき〕その時だとわかるので、汝は行きなさい。

ブラフマー神よ、かの仏国土においては、十の堅い決意<sup>(48)</sup>をもって過ごしなさい。十とは何かというと、(1) 優しく話す人<sup>(49)</sup>に対してもひどい口をきく人に対しても怒りを持たない心、(2) 好ましいことを聞いた場合にも好ましくないことを聞いた場合にも慈しみ〔を持つ〕心、(3) どんな時にも人々に対して<sup>(50)</sup>憐れみいとおしむ(悲)心、(4) 上位・中位・下位の人々に対しても正しく行動する<sup>(51)</sup>〔心〕、(5) 尊敬と軽蔑に対して平等な心、(6) 他人がどんな過失を犯してもあらさがしをしない〔心〕、(7) 種々の乗り物(教法)に対して一味(平等)である〔心〕、(8) 悪い生存状態(地獄・餓鬼・畜生)のどんな苦しみの声にも恐れなない〔心〕、(9) すべての菩薩は教主(仏陀)であるとの思い、[P 27b] (10) 五濁のある仏国土において如来にお会いすることは希有なことだとの思い、である。ブラフマー神よ、かの仏国土においては、これらの十の堅い決意をもって過ごしなさい」

## (I-9)

そこで、ブラフマー神であるヴィシェーシャチンティンは、世尊にこう申し上げた。

「私は、世尊の面前で獅子吼することは致しませんが、私の所行がどのようなものか、世尊は、よく御存知でおられますから、<sup>(52)</sup>…世尊よ、私はこれらの堅い決意を清浄にし、優れた精神集中によって、かの仏国土に住することに致します…<sup>(52)</sup>。

## (I-10)

その時、チャンドラプラバ如来・世尊の、かの仏国土にいる他の菩薩たちは、世尊にこう申し上げた。

「世尊よ、そのように、凶悪な人々が集まっているかの仏国土に私たちが生まれなかったことは、とても幸運なことです<sup>(53)</sup>」

(48) Tib: lhag pa'i bsam pa (Skt: adhyāśaya). Ch1:志性行. Ch2:法. Ch3:清浄堅固心.

(49) Tib: snyan par smra ba. Cf. *Mvy* 926 priyavadita.

(50) Ch2,3:於諸愚智.

(51) Tib: yang dag par sbyor ba (Skt: samyakprayoga). Ch2,3:意常平等.

(52) Ch3 のみこの部分を欠く.

(53) Tib: rnyed pa legs par rnyed (Skt: sulabdhā lābhā, how good it is; how fortunate (*MDP*)). Ch1:爲獲嘉慶. Ch2,3:得大利. Cf. 「心が一切知者性に向かうような人々は、よい結果を獲得し、幸福な生活を送る」 *lābhās teṣāṃ sattvānāṃ sulabdhāḥ, sujīvitāṃ ca te sattvā jīvanti, yeṣāṃ sarvajñatāyāṃ cittāṃ krāmati* / (*Asp* 215.4-5)

## (I-11)

かの世尊はこう仰せになられた。

「良家の子よ、おまえたちはそのようなことを言うてはならない。なぜかという、良家の子たちがこの仏国土において百・千劫のあいだ清浄行（梵行）に住するよりも、もしサハ世界において午前のあいだ怒りの気持ちを起こさずに過ごせたならば、その方がはるかに優れているからである。<sup>(54)</sup>…なぜなら、かの世界は、なによりもまず煩悩に汚されており、人々もまた、何よりもまず艱難（\*upadrava）が多く煩悩も多いからである。…<sup>(54)</sup>

## (I-12)

その時、かの仏国土から、一万二千の菩薩が、ブラフマー神であるヴィシエーシャチンティンとともに出発し〔ようとしてこう言っ〕た。

「<sup>(55)</sup>ブラフマー神よ、私たちもまた、かのサハ世界に参ります。これらの堅い決意を清浄に致します。<sup>(56)</sup>かのシャーキャ・ムニ世尊に〔P 28a〕お目にかかります。<sup>(57)</sup>…挨拶を致します。敬意を表します。優れた精神集中によって、かの仏国土に住します…<sup>(57)</sup>」

## (I-13)

そこで、ブラフマー神であるヴィシエーシャチンティンは、一万二千の菩薩とともに、チャンドラプラバ如来・世尊の足に頭をつけて礼拝してのち、<sup>(58)</sup>…ちょうど力持ちの男の腕が曲がった状態から伸び、あるいは伸びた状態から曲がったりするのにほんの一瞬しかかからないように、ほんの一瞬のうちに…<sup>(58)</sup>、かの仏国土から姿を消し、この正しい悟りを得られた尊敬すべきシャーキャ・ムニ如来・世尊の仏国土にやって来た。

## (I-14)

その時、世尊は、ジャーリニープラバ菩薩に仰せになられた。

「ジャーリニープラバよ、おまえはブラフマー神であるヴィシエーシャチンティンがやって来るのを見たか」

〔ジャーリニープラバが〕申し上げる。「世尊よ、見ました」

世尊が仰せになられた。

「ジャーリニープラバよ、このブラフマー神であるヴィシエーシャチンティンは、(1) 正しく

<sup>(54)</sup> Ch1,2はこの部分を欠く。

<sup>(55)</sup> Ch3のみここに「如来知我行菩薩行」という一文を加える。

<sup>(56)</sup> Ch1のみここに「各共持衛梵天大士」という一文を加える。

<sup>(57)</sup> Ch1,2はこの部分を欠く。

<sup>(58)</sup> 経典に見られる定型的表現。Cf. 「ナーガ（龍）たちは、ちょうど、力ある人が伸ばした腕を曲げたり、曲げた腕を伸ばしたりするような、そのような速さで、虚空の上方に〔昇って〕行く」 *nāgā upary antarīkṣe evaṃrūpeṇa javena gacchanti, tadyathāpi nāma balavān puruṣaḥ prasāritaṃ bāhu saṃkocayet saṃkocitaṃ bāhu prasārayet.* (*Krp* 191.15-17)

問い、質問することに巧みな菩薩たちの中で第一の者である。(2) [相手に] 理解されやすい言葉<sup>(59)</sup> [を語る] 人たちの中で第一の者である。(3) [相手に] 受け入れられる言葉<sup>(60)</sup> [を語る] 人たちの中で第一の者である。(4) 優美な言葉<sup>(61)</sup> [を語る] 人たちの中で第一の者である。(5) [相手より] 先に話しかける<sup>(62)</sup> 人たちの中で第一の者である。(6) [相手を] 尊敬する言葉を [語る] 人たちの中で第一の者である。(7) 障害 (意味の通じにくいこと) のない言葉を [語る] 人たちの中で第一の者である。(8) ある意図をこめた言葉を語る<sup>(63)</sup> 人たちの中で第一の者である。(9) 心怒ることのない人たちの中で第一の者である。(10) 慈心に住する人たちの中で第一の者である。(11) 悲心に住する人たちの中で第一の者である。(12) 喜心に住する人たちの中で第一の者である。(13) 捨心に住する人たちの中で第一の者である。(14) あらゆる疑問を断ち切り、質問することに巧みな菩薩たちの中で第一の者である」

(59) Tib: tshig gzung ba (Skt: grāhyavacana). Ch3:善巧隨意所宜説法. Ch3 は「相手に理解されるように工夫された言葉」と解しているのであろう。『菩薩地』に次のような例がある。

優しいことばをもつ菩薩は、現在において、4種のことばの過誤を捨てる。〔つまり〕虚言、人と人之間を裂くようなことば (両舌、離間語)、人を悩ます粗悪なことば (悪口)、口からでまかせのいい加減なことば (綺語) である。彼のそのことばは、自らを利するために、また他を利するために働く。現在において、また未来において、菩薩は、聞いて楽しくなることばを語り、そのことばは [相手に] 受け入れられやすく、理解されやすい。というこれが、菩薩が聞いて楽しくなることばを語ることの果報の賞賛だと理解すべきである。

priyavādī bodhisattvo dṛṣṭe dharme caturvidham vāgdoṣam vijahāti mṛṣāvādam paiśunyaṃ pārūṣyaṃ saṃbhinnapralāpaṃ ca. sā cāśya vāg ātmānugrahāya parānugrahāya ca pravṛttā bhavati. dṛṣṭa eva ca dharme āyatyāṃ ca priyavādī bodhisattva ādeyavacano bhavati grāhyavacanaḥ. ity ayaṃ bodhisattvasya priyavādītāyāḥ phalānuśaṃso veditavyaḥ. (*Bodhis* 304.16-22)

(60) Tib: tshig btsun pa (Skt: ādeyavacana, ādeyavākya). *Mvy* 2809: ādeyavākyaṃ, tshig gzung 'os sam btsun pa, tshig gzung ba 'am btsun pa. *MDP*: ādeyavacana, of acceptable speech; plausible talk(er).

(61) Tib: tshig 'jam pa (Skt: ślakṣṇa). Cf. (仏陀の母マーヤー夫人についての説明)「〔彼女は〕にこやかな顔で、[相手より] 先に挨拶のことばをかけ、そのことばは優美で甘い」smitamukhī pūrvābhilāpinī ślakṣṇamadhuravacanā. (*LV* 18.12)

(62) Tib: gsong por smra ba. Ch2,3:先意問訊. *Mvy* 787 pūrvābhilāpin, gsong por smra ba. Cf. (ある三昧についての説明)「〔相手より〕先に挨拶のことばをかける人であること、『ようこそいらっしゃい』という歓迎のことばをかける人であること」pūrvābhilāpitā, ehīti svāgatavādītā (*SR* 4.25); 「顔に笑みを浮かべて [相手より] 先に話しかけること」smitamukhapūrvābhilāpinī ślakṣṇamadhuravacanā (Tib: 'dzum pa'i bzhin gyis gsong por smra ba) (*KP*§24). なお、Tib: gsong po の原義は「誠実な」の意。Cf. *TED*: gsong por smra ba, to speak the truth.

(63) Tib: ldem por ngag tu smra ba. Ch3:密意言語. Cf. 「〔仏陀の説法は〕多くの、意図をこめたことばで語られた」bahūni (→ bahūhi) saṃdhāvācanehi cōktam (Tib: ldem por ngag rnam rab tu mang por bshad) (*SP* 59.4, ch.2 v.144c).

## (I-15)

その時、[P 28b] ブラフマー神であるヴィシェーシャチンティンと一万二千の菩薩たちは、ともに世尊のところに行き、行くと世尊の足に頭をつけて礼拝し、そのまわりを三回まわってから、世尊に向かって合掌をし、以下の詩によって、さまざまに〔世尊のことを〕誉め称えた。

- (1) 〔世尊への〕轟き渡る賞賛(\*vinarditavarna)は三界に知られ、賞賛の花輪(\*varṇamālā)は〔十方〕世界に行き渡っています。私には、最も優れた人(如来)たちが〔それぞれの仏〕国土におられるのが見えます。彼らもまたこぞってあなたさまの徳を称えておられます。
- (2) 私は<sup>(64)</sup>〔パリシュッダという〕極めて清浄な国土におりました。〔そこには〕汚れがなく、三つの悪い生存状態(三悪趣)もありません。彼ら(一万二千の菩薩たち)は、そのような国土を捨てて、あなたさまの悲心〔によって放たれた光明〕により、悪しき〔このサハー世界〕へとやって参ったのでございます。
- (3) あなたさまは世間の守護者であり、〔その〕知が劣るということはありません。スガタ(如来)たちは、あなたさまとまったく同等でございます。あなたさまは、以前<sup>(65)</sup>、極めて清浄な願いを立てられ、このような〔煩惱に汚された〕この仏国土を引き受けられた<sup>(66)</sup>のです。
- (4) たとえある人が、他〔の仏国土〕において一劫のあいだ欲望を断ち切って一切の戒を清浄に行じたとしても、それよりも、ある人が慈心をもってここ(サハー世界)においてほんの一瞬のあいだきちんと行じたらば、この方が<sup>(67)</sup>、はるかに優れています。
- (5) ある人に、身体的・言語的・意思的活動(三業)によって犯した罪が三種(三悪業)あって、三つの悪い生存状態(三悪趣)を経験しなければならない場合であっても、その〔罪〕は、まさにこの時(現世)において消滅するでしょう<sup>(68)</sup>。
- (6) ここにいる菩薩たちは、常に、悩まされることはありません。たとえその行為(業)が〔三悪趣に〕墮するほどのものであっても、それら〔の行為の余勢(業)〕は、ここにおいては、頭痛を病むことによって(頭痛を病む程度で)消滅します。
- (7) ここ(サハー世界)においては<sup>(69)</sup>、正法を護持し<sup>(70)</sup>、最上の法を保持して、欠点のない<sup>(71)</sup>菩薩たちは、これ以後どんな時も(どんな所に生まれ変わっても)<sup>(72)</sup>、正念を乱

(64) BLNPPHT: 'di ni. CDHK: 'di na. Ch1:我處異土清淨無垢. Ch2,3:有諸餘淨國.

(65) BKLPHT: sngon. CDHNP: mngon. Ch1:来今往古. Ch2,3:大悲本願.

(66) Tib: bzung. Ch1:將護. CH2,3:處.

(67) BKLPHT: 'di ni. CDHNP: 'dir ni.

(68) BKLPHT: 'byang. CDHN: 'byung. Ch1:滅尽. Ch2,3:得除. *Mvy* 7042: vyantībhavati, byang bar 'gyur. *BHSD* : vyantībhavati, coming to an end, being finished.

(69) BPPHT: na. CDHKLN: ni.

(70) BPPHT: srung. KLT: srungs. CDHN: gsungs. Ch1:將御擁護于斯正法. Ch2,3:若能守護法.

(71) BCDHKLNPHHT: skyon med. P: skyo med. Ch1:心設患厭(→心無患厭?).

(72) Tib: 'di las phyin chas nam du yang. Ch1:後世所處之地. Ch2,3:世所生處. *IAKBh* : phyin chas:

- したり判断力をなくしたりすることはありません。
- (8) もしある人が、魔の束縛を断ち、また煩惱や業を浄化する<sup>(73)</sup>ことを欲するならば、その人は、[P 29a] この(サハー)世界において正法を護持し<sup>(74)</sup>、ここにおいて知ある者の中の第一の者(如来)となるでしょう。
- (9) たとえある人が、他の国土において、[幾]コーティ劫ものあいだ、[明確な]意思を持って正法を保持したとしても<sup>(75)</sup>、それよりも、ある人がサハー〔世界〕において午前中〔というごく短いあいだ〕に〔そうする〕ならば、このほうが〔はるかに〕優れていると、巧みな人(如来)はお考えです。
- (10) アピラティ(歓喜)世界とアミターユス(無量寿仏)のスカークヴァティー(極楽)〔世界〕とが、私<sup>(76)</sup>には見えません<sup>(77)</sup>。そこには、苦も苦という言葉もありますが、そこにおいて、[どんな素晴らしい] 功德〔を積んだとしてもそれ〕は、それほど素晴らしいことではありません<sup>(78)</sup>。
- (11) 煩惱の生じる場所であり欠点に満ちたこの〔サハー〕世界において、怒りの心を抱いている人の激しい害悪に耐えながらも他の人たちをこの教法へと導くことは、あの〔アピラティ世界など他の仏国土における功德〕よりも困難な、最上のもの(功德)となります。
- (12) [あなたさまは] 悲心に心をうるおされて、[人々を] 多くの苦から救済なされます。[そのような] 最上の師であるあなたさまに私は礼拝致します。[法の] 主人(\*[dharama]svāmin 如来)といえども、世間において、凶悪な人間に法を説くことは、困難なことです。
- (13) <sup>(79)</sup>… 非常に広大なこの集会と、[十]方にその名のよく知られた仏子(菩薩)たちは、法に厭きることなく、海のように〔たくさん〕集まっています。彼らに対して[あなたさまは] 勝者(如来)の悟りをお説きになられます。…<sup>(79)</sup>
- (14) ブラフマー(梵天)、インドラ(天帝釈)、ローカパーラ(四天王)、デーヴァ、ナーガ、アスラ(阿修羅)、キンナラを含む、法を求める多くの集団に対して、[あなたさまは彼

ūrdhvam, pareṇa. AD : ūrdhvam, ind., afterwards, subsequent to (with abl.).

<sup>(73)</sup> KLPhT: sbyong. B: sbying. CDHNP: spyod. Ch1:浄除. Ch2,3:滅.

<sup>(74)</sup> BKLPPT: srung. CDHN: gsungs. Ph: grub. Ch1:將護. Ch2,3:護.

<sup>(75)</sup> Tib: sems ldan dam chos 'dzin par 'gyur pa. Ch:執持正法若講說者. Ch2:受持法解説. Ch3:受持清淨戒. IBcyp : sems dang ldan pa, cetanāyoga, cetanāvat.

<sup>(76)</sup> BKLPPhT: bdag. CDHNP: gang. Ch1:吾亦親見. Ch2,3:我見.

<sup>(77)</sup> BPh: mthong. CDHKLNP: mchog. Ch1:吾亦親見妙樂世界及復省察安樂佛土. Ch2:我見喜樂國及見安樂國. Ch3:我見安樂國無量壽佛國.

<sup>(78)</sup> Tib: rmad mi che. Ch1:不足爲性. Ch2:未足以爲奇. Ch3:非奇. Mvy 3102: avṛhāḥ, mi che ba. BHSD : avṛha, not great.

<sup>(79)</sup> Ch2:佛集無量衆, 十方世界中, 名聞諸菩薩, 聽法無厭足, 佛集十方界, 名聞諸菩薩, 聽法無厭足, 如海吞衆流, 爲如是等人, 廣説於佛道.

- らの] 信解 (\**adhimukti*) の度合に応じて法をお説きになられます。
- (15) 在家の男女の信者 (優婆塞・優婆夷) と出家の僧侶 (比丘・比丘尼) との、これら四つの集団 (四衆) が集まっています。それを聞けば完成された財宝に至るそういう法を、彼らに対してお説き下さいますようお願い致します。
- (16) 仏乗を常に信解している者たち、同様に、独覚乗や声聞乗 [を信解している者たち]、[彼らの] 心の状態がどのようであるかを御存知でおられる聖者<sup>(80)</sup> (如来) は、彼ら [の疑念という病] を癒すために<sup>(81)</sup>、[法を] お説き下さい。
- (17) 仏陀の家系 (\**buddhavaṃśa*) に住するために日をおくり、そこから三宝が生ずることになる悟りを深く思念している人 (菩薩) たち [の疑念という病] を癒すために、私は、法の王であるあなたさまに [法を説くことを] お願い致します。
- (18) あなたさまの、賞賛の花輪という名声を聞いて、智慧広大なこれら [P29b] [の菩薩たち] が集まって来ているのは幸いなことです。彼らが優れた人々であることを御存知なので、彼らに無上の行をお説き下さい。
- (19) このように<sup>(82)</sup>、スガタ (如来) の知は不可思議です。この [知] は、偉大な阿羅漢 [が到達できる] 境地 (\**bhūmi*) でもなく、独覚 [が知りうる] 境界 (\**viṣaya*) でもありません。私は、指導者 (如来) に対する淨信 (\**śraddhā*) に従って、[そのような如来の知に入りたいと願って]<sup>(83)</sup> います。
- (20) 私は、あなたさまにこの偉大な意義を質問致しますが、世間の指導者 (如来) であるあなたさまにおかれては、私 [のこの質問] をお認め下さいますようお願い致します。あなたさまのお心にはおよそ疲倦するということがございませんから、悟りへの最上の道をお説き下さいますようお願い致します。

## (II-1)

さて、ブラフマー神であるヴィンシェーシャチンティンは、世尊の面前でこれらの詩を説き終えると、世尊に向かってこう申し上げた。

「(1) 世尊よ、どのようにしたら菩薩たちは、決意 (\**adhyāśaya*) が堅固で心が疲倦することのない者となるのでしょうか。(2) 世尊よ、どのようにしたら菩薩たちは、<sup>(84)</sup>… きっぱりと断言してもその言葉が [相手を] 苦しめること (\**saṃtāpa*) のない…<sup>(84)</sup>者となるのでしょうか。(3) どのようにしたら、善根が増長する者となるのでしょうか。(4) どのようにしたら、[心が] 乱され

(80) BKLPhT: thub. CDHNP: theg. Ch1:能仁. Ch2,3:佛.

(81) Tib: sman pa'i slad du. Ch1:決一切疑. Ch2,3:斷疑.

(82) BPh: 'di ltar. CDHKLPNT: 'dir ltar.

(83) 3 漢訳のみ. Ch1:余等信樂最勝所度. Ch2:我等信力故得入如是法. Ch3:我等信力入.

(84) Tib: mgo gcig tu smra zhing tshig gdung ba med pa. Ch1: 所言柔和辭無惱熱. Ch2,3:所言決定而不中悔. BHSD : ekāṃśena, wholly, exclusively, absolutely. IBcvp : gdung ba, āṛta, pīḍita, vyaṣana, saṃtāpa. Cf. KP §25: ekāṃśavacanatā (Tib: gcig tu chad par smra ba).



ることなく<sup>(85)</sup>、振舞い（威儀）も動揺することのない者となるのでしょうか。(5) どのようにしたら、善なることがら（白法）が増大した者となるのでしょうか。(6) どのようにしたら、〔修行階梯の〕或る段階（\*bhūmi）から次の段階へと上がっていく<sup>(86)</sup>者となるのでしょうか。(7) どのようにしたら、人々を成熟させる方法（方便）に巧みな者となるのでしょうか。(8) どのようにしたら、人々に奉仕する<sup>(87)</sup>ことに巧みな者となるのでしょうか。(9) どのようにしたら、菩提心を守る<sup>(88)</sup>者となるのでしょうか。(10) どのようにしたら、心を専一にして精神の乱れることのない者となるのでしょうか。(11) どのようにしたら、法を追求することに巧みな者となるのでしょうか。(12) どのようにしたら、罪悪（毀禁）から抜け出ること巧みな者となるのでしょうか。(13) どのようにしたら、煩惱を抑制（調伏）することに巧みな者となるのでしょうか。(14) どのようにしたら、集会〔に集まっている大勢の人々〕の中に入って行くことに巧みな者となる

(85) Tib: bslad pa ma mchis. Ch1:不卒暴. Ch2,3:無所恐畏. *IBcyp* : bslad pa, upapluta, vipluta, vibhramita. Cf. 「そ〔の二諦〕のうち、世俗諦は、心が無明によって乱された人々にとって、それ（saṃvṛti 覆われること）を本質とするものとして理解される」 tatra avidyopaplutacetāsāṃ tatsvabhāvatayā saṃvṛtisatyam iti pratītam (*Bcyp* 175.25).

(86) Tib: sa nas sar 'phar bar bgyid pa. Ch2,3:善知従一地至一地. 『二万五千頌般若経』に次のような用例がある。

スプーティは「どうしたら、菩薩大士は大乘に向かって出発したものとなるのですか」と言ったが、この場合、スプーティよ、菩薩大士は六波羅蜜多を実践するときに、地から地へと越えて行くのである。スプーティよ、どうやって菩薩大士は地から地へと越えて行くのかと言えば、つまり、すべての法を越えて行かないことによってである。なぜかと言えば、いかなる法も来ることなく行くことなく、越えて行くことなく、越えて来ることがないからである。また、〔菩薩大士は〕およそ諸法の地というものを、思うことも考えることもなく、地への準備を行いながら地を見ることはないからである。

yad api tat subhūtir evam āha / kathaṃ bodhisattvo mahāsattvo mahāyānasamprasthito bhavatīti / iha subhūte bodhisattvo mahāsattvaḥ ṣaṣṭsu pāramitāsu caran bhūmer bhūmiṃ saṃkrāmati / kathaṃ ca subhūte bodhisattvo mahāsattvo bhūmer bhūmiṃ saṃkrāmati yad utāsaṃkrānti sarvadharmāṇāṃ / tat kasya hetoḥ / na hi sa kaścid dharmo ya āgacchati vā gacchati vā saṃkrāmati vā upasaṃkrāmati vā / api tu yā dharmāṇāṃ bhūmis tān na manyate na cintayati bhūmiparikarma ca karoti na ca bhūmiṃ samanupaśyati / (*Pvsp* 214.6-11) ; 佛告須菩提。汝問云何菩薩摩訶薩大乘發趣。若菩薩摩訶薩行六波羅蜜時。從一地至一地。是名菩薩摩訶薩大乘發趣。須菩提白佛言。世尊。云何菩薩摩訶薩從一地至一地。佛言。菩薩摩訶薩知一切法無來去相。亦無有法若來若去若至若不至。諸法相不滅故。菩薩摩訶薩於諸地不念不思惟而修治地業亦不見地。 (*Taisho* Vol.8, 256.4-11)

Cf. 『大智度論』：問曰。應答發趣大乘。何以說發趣地。答曰。大乘即是地。地有十分。從初地至二地是名發趣。譬如乘馬趣象捨馬乘象。乘象趣龍捨象乘龍。 (*Taisho* Vol.25, 411a22-25)

(87) Tib: nye bar spyod pa ( Skt:upacāra). Ch1: 於彼同倫分別教化. Ch2:善化衆生. Ch3:隨順諸衆生.

(88) Tib: byang chub kyi sems srung ba. Ch1:能護道心. Ch2:不失菩提之心. Ch3:不失菩提心. (II-3) の答 (9) では、Ch1 以外のすべての伝本で「菩提心を失うことはない」となっている。

のでしょうか。(15) どのようにしたら、法〔施〕を [P 30a] 行う (\*dharma[dāna]vitarāṇa)<sup>(89)</sup> ことに巧みな者となるのでしょうか。(16) どのようにしたら、因の力 (\*hetubala)<sup>(90)</sup> を得ることによって善根が消滅 (\*vināṣṭa) することのない<sup>(91)</sup>者となるのでしょうか。(17) どのようにしたら、布施の完成 (布施波羅蜜多) において、〔他から〕教示されることなく〔自ら〕布施を行い、同様に、智慧に至るまで〔の完成 (般若波羅蜜多)〕において、〔他から〕教示されることなく〔自ら〕知る者となるのでしょうか。(18) どのようにしたら、禪定の楽しみ〔に耽けること〕から逃れることに巧みな者<sup>(92)</sup>となるのでしょうか。(19) どのようにしたら、仏陀の教え (仏法) から退転しない者となるのでしょうか。(20) どのようにしたら、仏陀の家系 (\*buddhavaṃśa) を断たない者<sup>(93)</sup>となるのでしょうか

## (II-2)

<sup>(94)</sup>… こう言われて、世尊は、ブラフマー神であるヴィシェーシャチンティンに次のように仰せになられた。

「ブラフマー神よ、まことにその通りだ。ブラフマー神よ、おまえが如来にこのようなことを尋ねようと考えたことはよいことだ。ブラフマー神よ、それゆえよく聞いて、心の中でよく思念しなさい。〔君に〕語ってあげよう」

## (II-3)

ブラフマー神であるヴィシェーシャチンティンが、「世尊よ、そう致します」と言って、世尊に約束すると、世尊はこう仰せになられた。…<sup>(94)</sup>

<sup>(89)</sup> Tib: chos rnam par 'byed pa. Ch1: 恢開法施流演剖判. Ch2,3: 開法施. (II-3) の答 (15) では、漢訳を含めてすべての伝本が「法施」とし、MSA における引用 (注 110) でも大法施 (mahādharma-dāna) としているので、ここも「法施を行う」とすべきである。

<sup>(90)</sup> 『菩薩地』は、初発心のための四縁・四因・四力を説いている。このうち四力とは「自己の力 (adhyātmabala)」「他人の力 (parabala)」「因 (直接原因) の力 (hetubala)」「実践の力 (prayogabala)」のことであるが、「直接原因の力 (hetubala)」を次のように説明している。

菩薩の前世における大乘と相応した善なる法の反復修習が、現在において、仏陀や菩薩を見ることだけで、あるいは、その賞賛を聞くことだけで、ただちに、発心への〔直接原因の力になる〕。まして、威神力を見たり、あるいは正しい教えを聞くことで、発心への直接原因の力になると言われることは言うまでもない。

pūrvako bodhisattvasya mahāyānapratīṣṭakūśaladharmābhyāsa etarhi buddhabodhisattvasaṃdarśanamātrakeṇa tadvarṇaśravaṇamātrakeṇa vā āśu cittasyotpattaye. prāg eva prabhāvarāśanena vā saddharmaśravaṇena vā hetubalam ity ucyate cittasyotpattaye. (*Bodhis* 17.14-18)

<sup>(91)</sup> Tib: chab mi 'tshal ba. TCD : chab 'tshal ba, chud zos su song ba'am / brlag pa. 浪費, 消耗。

<sup>(92)</sup> Ch2,3: 能轉捨禪定遷生欲界。

<sup>(93)</sup> Ch3: 不斷佛種如實修行。

<sup>(94)</sup> 経典に見られる定型的表現。例えば『善勇猛般若経』には次のようにある。

〔(1) ブラフマー神よ、四法を持てば、菩薩大士たちは、決意が堅固で心の疲倦しない者となる。四つとは何かと言え、人々に対する慈しみの心、飽くことのない努力（精進）、輪廻〔の世界〕は夢のようなものだと思ふこと、仏陀の智慧は等しいものがないほどに優れている（\*asamasama）と思量する<sup>(95)</sup>こと、である。ブラフマー神よ、これらの四法を持てば、菩薩大士たちは、決意が堅固で心の疲倦しない者となる。

(2) ブラフマー神よ、四法を持てば、菩薩大士たちは、きっぱりと断言してもその言葉が〔相手を〕苦しめることのない者となる。四つとは何かと言え、菩薩たちが諸法は無我（\*niṣpudgala）であるときっぱりと断言すること、菩薩たちが〔およそ生き物が〕生まれる所はどんな所もすべて喜びなど〔P 30b〕ないときっぱりと断言すること、菩薩たちが大乘の素晴らしさをきっぱりと断言すること、菩薩たちが善不善の行為〔の影響力〕は消失することがない〔という業の法則〕をきっぱりと断言すること、である。ブラフマー神よ、これらが菩薩大士たちの四つの断言である。

(3) ブラフマー神よ、次の四法は、菩薩大士たちの善根が増長する。四つとは何かと言え、持戒、〔多〕聞、布施、出家のこれら四つである。

(4) ブラフマー神よ、四法を持てば、菩薩たちは、〔心が〕乱されることなく、振舞（威儀）も動揺することのない者となる。四つとは何かと言え、<sup>(96)</sup>… 利を失うこと（\*alābha）、非難（\*nindā）、悪名（\*akīrti）、苦惱〔の、これら四つを恐れないこと〕である…<sup>(96)</sup>。ブラフマー神よ、これらの四法を持てば、菩薩大士たちは、〔心が〕乱されることなく、振舞（威儀）も動揺することのない者となる。

(5) ブラフマー神よ、四法を持てば、菩薩大士たちは善なることがら（白法）<sup>(97)</sup>が増大する。

---

このように言われて世尊は、スヴィクラーンタヴィクラミン菩薩大士に次のように仰った。「スヴィクラーンタヴィクラミンよ、おまえが如来〔である私〕に、多くの人々を哀れんで、この智慧波羅蜜多について尋ねたことは、すばらしいことであり、おまえの功德の果てを極めることはとても難しいことである。それ故、スヴィクラーンタヴィクラミンよ、おまえはよく聞き、よく思念しなさい。私はおまえに〔智慧波羅蜜多について〕語ってあげよう」「お願いします、世尊よ」と言って、スヴィクラーンタヴィクラミン菩薩大士は、世尊に耳を傾けた。世尊は次のように仰った。……

Evam ukte Bhagavān Suvikrāntavikrāmiṇaṃ bodhisatvaṃ mahāsatvaṃ etad avocat: “Sādhu Sādhu Suvikrāntavikrāmin guṇānāṃ te na sukaraḥ paryanto ’dhigantuṃ, yas tvaṃ Tathāgataṃ mahato janakāyasyānukampāyā imāṃ prajñāpāramitāṃ paripṛcchasi, tena hi tvaṃ Suvikrāntavikrāmiṇ śṛṇu sādhu ca suṣṭhu ca manasikuru, bhāṣiṣye, ’haṃ te.” “sādhu Bhagabann” iti Suvikrāntavikrāmi bodhisatvo mahāsatvo Bhagavataḥ pratyaśrauṣīt. Bhagavān etad avocat: … (Su 6.24-7.3)

<sup>(95)</sup> Tib: yongs su ’jal ba (Skt: paritārayati). Ch2:正思量. Ch3:正思惟. Cf. *GDbh*: paritārayati, yongs su ’jal, 思惟分別.

<sup>(96)</sup> Tib: rnyed pa med pa dang / smad pa med pa(B:smad pa) dang / grags pa med pa dang / sdug bsngal. Ch1:無利無譽無名無苦. Ch2:一者失利, 二者惡名, 三者毀辱, 四者苦惱. Ch3:一者不畏不得財利故, 二者不畏毀辱故, 三者不畏惡名, 四者不畏苦惱故. Tib の smad pa med pa を, B, Ch2,3(毀辱) により smad pa とする.

<sup>(97)</sup> Tib: dge ba’i rtsa ba. Ch1 於清淨法多所長益功德之本. Ch2,3:白法. Tib のみが「善根」とするが、(II-1) の

四つとは何かと言え、人々を悟りへと向かわせること、布施を行ってもその果報を望まないこと、正法を保持すること、菩薩たちに対して智慧を説くこと、のこれら四つである。

(6) ブラフマー神よ、四法を持てば、菩薩大士たちは〔修行階梯の〕或る段階から次の段階へと上がっていく。四つとは何かと言え、善根を積むこと、あらゆる過失を捨て去ること、廻向に巧みなこと、努力（精進）〔する気持ち〕を燃え上がらせること、のこれら四つである。

(7) ブラフマー神よ、四法を持てば、菩薩大士たちは人々を成熟させる方法（方便）に巧みな者となる。四つとは何かと言え、人々〔の意向〕に [P 31a] 従うこと、他人の功德に対して随喜すること、過失を告白する（懺悔）こと、すべての仏陀に教えを請う（勸請）こと、のこれら四つである。

(8) ブラフマー神よ、四法を持てば、菩薩大士たちは人々に奉仕することに巧みな者となる。四つとは何かと言え、あらゆる人に対して利益を与える気持ちを持つこと、自分の幸福を欲しないこと、忍耐しつつ柔軟（\*sauratya）であること、高慢心を打ち砕くこと、のこれら四つである。

(9) ブラフマー神よ、四法を持てば、菩薩大士たちは菩提心を失うことはない。四つとは何かと言え、仏陀を憶念することに精神を集中させること（\*buddhānusmṛtīmanasikāra）、すべての善根を菩提心が導いている<sup>(98)</sup>こと、善き友（善知識）に仕えること、大乘を賞賛すること、のこれら四つである。

(10) ブラフマー神よ、四法を持てば、菩薩大士たちは、心専一にして精神の乱れることのない者であると知られる。四つとは何かと言え、声聞の心を捨て去ること、独覚の精神集中（\*manasikāra）を捨て去ること、法を追求することに飽きないこと、聞いた通りに法を説くこと<sup>(99)</sup>、のこれら四つである。

(11) ブラフマー神よ、<sup>(100)</sup>… 四法を持てば、菩薩大士たちは法を追求する〔ことに巧みな者となる〕。四つとは何かと言え、〔法は〕手に入れることが難しいから宝であると思うこと、〔法は煩悩という〕あらゆる病気を鎮めるから薬であると思うこと、〔法は〕無くなってしまいうことがないから財産であると思うこと、〔法はそれ自体〕涅槃しているからすべての苦を鎮めると思うこと…<sup>(100)</sup>、のこれら四つである。

問 (5) では漢蔵すべての伝本が「白法 (chos dkar po)」とするので、ここも「白法」とする。

<sup>(98)</sup> Tib: dge ba'i rtsa ba thams cad la byang chub kyi sems sngon du 'gro ba (Skt: sarvakuśalamūlā bodhicittapūrvavaṅgamāḥ). Ch1:一切徳本至於道心. Ch2:所作功德常爲菩提. Ch2:所作善根不離菩提心. Cf. KP§25:bodhicittapūrvavaṅgamatā (Tib:byang chub kyi sems sngon du 'gro ba).

<sup>(99)</sup> Cf. KP§2:「〔師から〕聞いた通りの、また〔自ら〕悟り得た通りの法を詳しく説き示す」yathāśrutāṃś ca dharmān yathāparyāptān parebhyo vistareṇa samprakāśayati (Tib:ji ltar thos pa dang / ji ltar khong du chud pa'i chos rnamz gzhān dag la rgya cher yang dag par rab tu ston par byed pa yin).

<sup>(100)</sup> [引用]『大乘莊嚴經論』(Mahāyānasūtrālamkāra)

[Skt]: ata evoktaṃ brahmapariṣcchāsūtre / caturbhir dharmaiḥ samanvāgatā bodhisatvā dharmāṃ paryeṣante / ratnasamjñayā durlabhārthena bhaiṣajyasamjñayā kleśavyādhiprasamanārthena arthasamjñayā aviprañāśārthena nirvāṇasamjñayā sarvaduḥkhaṇaprasamanārthena /

(12) ブラフマー神よ、四法を持てば、菩薩大士たちは、罪惡（戒律を破ること）から抜け出ること巧みな者となる。四つとは何かと言えば、法は内的には不生だということを容認すること（無生法忍）<sup>(101)</sup>、[P 31b] [法は] 推移しないから滅することはないと容認すること（無滅忍）、原因を詳しく観察するから [法は] 依存して生ずるのだと容認すること（因縁忍）、心は相互に連続している [のだと容認する] こと（無住忍）<sup>(102)</sup>、のこれら四つである。

(13) ブラフマー神よ、四法を持てば、菩薩大士たちは煩惱を清浄にする<sup>(103)</sup>。四つとは何かと言えば、正しく観察すること、[煩惱をそれが] まだやって来ていない時に抑えること<sup>(104)</sup>、善なることがら（白法）の力を生ずること<sup>(105)</sup>、[人里] 離れて [一人で] いること<sup>(106)</sup>、のこれら四つである。

(14) ブラフマー神よ、四法を持てば、菩薩大士たちは、集会 [に集まっている大勢の人々] の中に入って行く。四つとは何かと言えば、法を望むからであって [人の隙に] つけ込もう<sup>(107)</sup> という気持ちからではないこと、尊敬の念を抱いているからであって慢心による思い上がりからではないこと、善なるものを求めるからであって自らを誇るためではないこと、人々を善根へと導くためであって [物を] 手に入れたり尊敬されたり詩 [で誉め称えられたりする]<sup>(108)</sup>ためでは

(MSA 75.19-76-2)

[Tib]: (de nyid kyi phyir ) tshangs pas zhus pa'i mdo las / chos bzhi dang ldan pa'i byang chub sems dpa' rnam chos yongs su tshol bar 'gyur te / dkon pa'i don gyis rin po che'i 'du shes dang / nyon mongs pa'i nad rab tu zhi bar byed pa'i don gyis sman gyi 'du shes dang / chud mi za ba'i don gyis nor gyi<sup>1</sup> 'du shes dang / sdug bsngal thams cad rab tu zhi ba'i don gyis mya ngan las 'da' ba'i 'du shes dang ldan pa zhes gsungs so // ( Peking ed. Sems-tsam Phi 194a4-7) 1) P: gyis.

[Ch]: 如梵天王問經說。菩薩求法具足四想。一者如妙寶想，難得義故 二者如良藥想，除病義故。三者如財物想，不散義故。四者如涅槃想，苦滅義故。( Taisho vol.31 618a20-23 )

(101) Tib: nang nas mi skye ba'i chos la bzod pa. Ch1:興不起忍。Ch2:得無生法忍，以諸法無來故。Ch3:得無生忍，以諸法內觀故。

(102) Tib: gcig nas gcig tu sems phan tshun du gyur pa. Ch1:忍無所住，亦無異心汲汲之事。Ch2:得無住忍，無異心相續。Ch3: 得無住忍，無新無舊。

(103) Tib: rnam par sbyong ( Skt: viśodhana). ただし，(II-1) の問 (13) では，Tib: 'dul ba (Skt: vinaya). 漢訳は問と同じ。Ch1:於諸塵勞部分開化。Ch2:善障煩惱。Ch3:善斷諸煩惱。

(104) Tib: ma 'ongs pa na sdom pa. Ch1:將護禁戒。Ch2:障諸根。Ch3:遠離未來諸障增長諸白法故。

(105) Tib: skar po'i chos kyi stobs bskyed pa. Ch1:曉諸法力。Ch2:得善法力。Ch3:得善法力故。

(106) Tib: rab tu dben par gnas pa. Ch1:樂處燕居。Ch2, 3:獨處遠離故。

(107) Tib: klan ka tshol ba (Skt: avatāragaveśin). Ch1:求他短。Ch2, 3:求勝。Cf. 「彼ら法師たちに対して，すきを狙い，すきを求めても，だれもすきにつけ込むことはないでしょう」 teṣām dharmabhāṇakānām na kaścid avatāraprekṣy avatāragaveṣy avatāraṃ lapsyati (SP 400.10-11).

(108) Tib: rnyed pa dang / bkur sti dang / tshigs su bcad pa. Cf. 「私は常に，利得・尊敬・[賞賛の] 詩頌に

ないこと、のこれら四つである。

(15) ブラフマー神よ、<sup>(110)</sup>… 四法を持てば、菩薩大士たちは法施を行う。四つとは何かと云えば、正法を護持すること、自分の智慧を明浄にすること<sup>(109)</sup>、善き人の行いをする事、煩惱と清浄を説き示す事…<sup>(110)</sup>、のこれら四つである。

(16) ブラフマー神よ、四法を持てば、菩薩大士たちは、因の力を得ることによって善根が消滅することはない。四つとは何かと云えば、他人の失敗に関して〔それを〕欠点として見ないこと、腹を立てている人に対して慈しみの心を修習すること、諸法の因を説くこと、菩提心を捨てないこと、のこれら四つである。

(17) ブラフマー神よ、四法を持てば、菩薩大士たちは、六つの完成（六波羅蜜多）において〔他から〕教示されることなく〔自ら〕知る者となる。四つとは何かと云えば、諸々の布施を [P 32a] 第一とすること（\*dānapūrvamaṅgama）、罪があるからといって他人に対して論争をしかけないこと、人々を成熟させるために〔四〕摂法に巧みであること、諸法に関して深く信解していること、のこれら四つである。

(18) ブラフマー神よ、<sup>(111)</sup>… 四法を持てば、菩薩大士たちは、禪定に住した後〔その楽しみに耽けることから逃れて〕欲界に生まれる。四つとは何かと云えば、心が柔軟であること（\*cittakarmanṣyatā）、善根の力を生じること、人々を見捨てることはしないこと、方便と智慧を修習すること…<sup>(111)</sup>、のこれら四つである。

対して、火・毒・武器だとの思いを起こしますように」 nityaṃ cāhaṃ lābhasatkāraśloke 'gniviṣaśastrasamjñām utpādayeyam / (*Krp* 169.13-14)

(109) Tib: bdag nyid kyi shes rab gsal bal byed pa. Ch1:化己及彼使入智慧. Ch2, 3:自益智慧亦益他人. 次注で挙げる *MSA* の引用では, Skt: ātmanaḥ prajñōttāpanatayā (自らの智に磨きをかけること); Tib: bdag nyid kyi shes rab sbyangs pa dang (自らの智を浄化すること) とある。

(110) [引用] 『大乘莊嚴經論』 (Mahāyānasūtrālamkāra)

[Skt]: yad uktam brahmapariprcchāyām / caturbhir dharmaiḥ samanvāgatā bodhisatvā mahādharmadānaṃ vitaranti saddharmaparigrahaṇatayā ātmanaḥ prajñōttāpanatayā satpuruṣa-karmakaraṇatayā saṃkleśavyavadānaśaṃdeśanatayā ca / (*MSA* 78.5-7)

[Tib]: (tshigs su bcad pa 'di ni ) 'phags pa tshangs pas zhus pa'i mdo las / chos bzhi po dam pa'i chos yongs su 'dzin pa dang / bdag nyid kyi shes rab sbyangs pa dang / skyes bu dam pa'i las byed pa dang / kun nas nyon mongs pa dang / rnam par byang ba yang dag par ston pa dang ldan pa'i byang chub sems dpa' sems dpa' chen po rnam ni chos kyi sbyin pa chen po rnam par 'byed do // ( Peking ed. Sems-tsam Phi 196a5-7)

[Ch]: 如梵天王問經說。菩薩四法具足則能開於廣大法施。何等爲四。一者攝治妙法。二者自慧明淨。三者作善丈夫業。四者顯示染淨。( Taisho vol.31 619a17-20 )

Cf. 長尾 [2007]167.16-169.9.

(111) [引用] 『弥勒菩薩所問經論』

[Ch]: (以是義故) 聖者思益梵天所問修多羅中。如來說言。若諸菩薩摩訶薩等成就四法, 修行四禪生於欲界。何

(19)<sup>(112)</sup>… ブラフマー神よ、四法を持てば、菩薩大士たちは、仏法（仏陀の教え）から退転しない者となる。四つとは何かと言えば、無量の輪廻を受け入れること、無量の仏陀に供養し仕えること…<sup>(112)</sup>、無量の慈心を修習すること、無量の悲心を修習すること<sup>(113)</sup>、のこれら四つである。

(20) ブラフマー神よ、四法を持てば、菩薩大士たちは、仏陀の種姓を断つことはない<sup>(114)</sup>。四つとは何かと言えば、過去に誓ったこと（本願 \*pūrvapratijñāta）から離れない（退転しない）こと、発言した通りに行動すること、善根を深く信解すること<sup>(115)</sup>、思念（\*āśaya）の修行（\*pratipatti）に住すること<sup>(116)</sup>である。ブラフマー神よ、これらの四法を持てば、菩薩大士たちは、仏陀の種姓を断つことはない」

#### (II-4)

世尊がこの〔新たに〕説き出された<sup>(117)</sup> 四〔法〕を語られた時、神と人間とを含めた生き物（\*prajā）のうち三万二千<sup>(118)</sup>の命あるもの（\*prāṇin）たちが、このうえなく正しい悟りへと発心した。五千人の菩薩たちもまた、法は本来生じることはないと容認する智慧（無生法忍）を起こした。種々の仏国土から [P 32b] 集まって来ていた菩薩たちも、世尊に対して供養するため

等四法。一者得心自在。二者具足諸善根力。三者觀察一切衆生。四者修行方便般若。（Taisho vol.26 265c3-7）

(112) [引用]『修習次第・後編』(Bhāvanākrama III)

[Skt]: caturbhir brahma dharmaiḥ (samanv)āgatā bodhisatvā avaiivarttikā bhavanti buddhadharmeṣu / katamaiś caturbhiḥ / aparimitasamsāraparigraheṇa / aparimitabuddhopasthānapūjayā /... (Bhk 24.19-25.3)

[Tib]: tshangs pa byang chub sems dpa' chos bzhi dang ldan pa rnams sangs rgyas kyi chos rnams las phyir mi ldog pa yin no // bzhi po de dag gang zhe na / 'khor ba dpag tu med pa yongs su 'dzin pa dang / sangs rgyas dpag tu med pa la rim gro dang mchod pa dpag tu med pa byed pa ... (Peking ed. dBu-ma A 71b7-8)

(113) Ch1: 嗟了無際諸佛之慧. Ch2: 信解無量佛慧.

(114) Ch3: 不斷佛種如實修行.

(115) Ch1: 捐棄重貪. Ch2: 大欲精進. Ch3: 於諸善法大欲精進.

(116) Tib: bsam pa'i nan tan la gnas pa. Ch1: 建立者處於本性. Ch2, 3: 深心行於佛道.

(117) Tib: mngon par bsgrub(s) pa (Skt: abhinirhṛta). Cf. 「世尊が仰った。シャーリプトラよ、このように説き出されたパーラミター（完成）は、いかなる法をも確立することはない。いかなる法をも確立することはないからこそ、パーラミター（完成）と呼ばれるのである」 bhagavān āha: evam abhinirhṛtā śāriputra prajñāpāramitā na kaṃcid dharmam arpayati, yato na kaṃcid dharmam arpayati tasmāt prajñāpāramiteti saṃkhyāṃ gacchati (Pvsp II-III 145.11-13).

なお、初期大乘経典における abhinirhṛta, abhinirhāra の意味・用例等については村上 [1998] が詳しい。

(118) Ch1: 二江河沙. Ch2, 3: 二萬二千.

に、この三千大千世界を天華によって膝が埋まってしまうまでに覆った。

(III-1)

その時、法王子であるジャーリニープラバが、ブラフマー神であるヴィシューシャチンティンに向かってこう言った。

「ブラフマー神よ、世尊はあなたのことを、正しく質問することに巧みな菩薩たちの中で最も優れていると仰せになられたが、では、どのように質問したら、正しく質問する菩薩である〔と言える〕のでしょうか」

ヴィシューシャチンティンが言う。

「良家の子よ、〔本来非存在である〕自分（我）というものをあたかも存在しているかのごとくに考えて（増益 \*samāropa）質問すれば、間違って質問したことになります。他者というものをあたかも存在しているかのごとくに考えて質問すれば、間違って質問したことになります。法というものをあたかも存在しているかのごとくに考えて質問すれば、間違って質問したことになります。ジャーリニープラバよ、自分（我）というものをあたかも存在しているかのごとくに考えることなく、他者というものをあたかも存在しているかのごとくに考えることなく、法というものをあたかも存在しているかのごとくに考えることがなければ、それが、正しく質問するということです。

さらにまた、ジャーリニープラバよ、生のために質問すれば間違って質問したことになります。滅のために質問すれば間違って質問したことになります。住 (\*sthiti) とか不住 (\*asthiti) とかいうことのために質問すればそれは間違っています。ジャーリニープラバよ、法というものの生のために、滅のために、あるいは住・不住のために質問するということがなければ、それが正しい質問です。

さらにまた、ジャーリニープラバよ、汚れ (\*saṃkleśa) のために質問すればそれは間違っています。清浄 (\*vyavadāna) のために質問すればそれは間違っています。輪廻のために質問すればそれは間違っています。輪廻からの離脱のために質問すればそれは間違っています。涅槃のために質問すればそれは間違っています。ジャーリニープラバよ、汚れのためでなく、清浄のためでなく、輪廻のためでなく、[P 33a] 輪廻からの離脱のためでなく、また涅槃のために質問することがなければ、それが正しい質問です。なぜかといえば、法の不変性 (\*dharmaniyāmatā) は、汚れてもいず、清浄でもなく、輪廻せず、涅槃もしていないからです。

さらにまた、ジャーリニープラバよ、獲得 (\*prāpti) のために質問すればそれは間違っています。直証 (\*sākṣātkriyā) のために質問すればそれは間違っています。神通 (\*abhijñā) のために質問すればそれは間違っています。了知 (\*parijñā) と修習 (\*bhāvanā) のために質問すればそれは間違っています。離脱 (\*viyoga) のために質問すればそれは間違っています。ジャーリニープラバよ、獲得がなく、証得 (\*grāha) がなく、証悟 (\*abhisamkāra) がなく、分別 (\*saṃkalpa) がなく、了知がなく、依止 (\*sthāna) がなく、修習がなく、修習を見ることがなければ、それが正しい質問です。

さらにまた、ジャーリニープラバよ、これは善である、これは不善である、これは有漏である、これは無漏である、これは過失 (\*avadya) である、これは無過失 (\*anavadya) である、これは有為である、これは無為である、これは世間的である、これは出世間的である、というふうに質問すればそれは間違っています。ジャーリニープラバよ、二〔つの対立〕に落ち込んで質問する



かぎり間違っているのです。ジャーリニープラバよ、二〔つの対立〕がなく、不二がなく、表象 (\*saṃjñā) がなく、名称 (\*nāma) がなく、また普遍性 (\*sāmānya) に落ち込むことがなければ、それが正しい質問です。

さらにまた、ジャーリニープラバよ、仏をさまざまに区別し (\*nānākaraṇa)、法をさまざまに区別し、僧団をさまざまに区別し、〔仏〕国土をさまざまに区別し、人々(衆生)をさまざまに区別し、教理(乗 \*yāna) をさまざまに区別することは間違っています。ジャーリニープラバよ、およそ法というものを、さまざまなものとして、あるいは一つのものとして [P 33b] 質問することがなければ、それが正しい質問です。

(125)... さらにまた、ジャーリニープラバよ、すべての法は正しく、すべての法は正しくないのです」

### (III-2)

〔ジャーリニープラバが〕言う。

「ブラフマー神よ、どのような場合に、すべての法は正しく、すべての法は正しくないのでしょうか」

〔ヴィシェーシャチンティンが〕言う。

「すべての法は不可思議 (\*acintya) なものだから、すべての法は正しいのです。(120)... およそ、不可思議な法に対して心を向ける<sup>(119)</sup>とき、それら〔諸法〕は正しくないのです。...(120) すべての法が遠離 (\*viveka) をその特徴 (\*lakṣaṇa) としていること、それが正しいということですから。もし遠離を信解 (\*adhimukti) しない人がいるとすれば、そういう人たちは〔法を実体化してそれを〕目標とすることにおちいつている<sup>(121)</sup>のです。〔法を〕目標とすることにおちいるよ

(119) Tib: sems par zhugs pa. Ch1: 假使心法其心精進、彼不應順。 Ch2: 若於無心法中以心分別觀者、一切法名爲邪。 Ch3: 若不可思議而思議者、一切法名爲邪。次注参照。

(120) [引用]『修習次第・後編』(Bhāvanākrama III)

[Skt]: tat punar [brahmapa]riṣṭchāyām uktam / ye tv acintyeṣu dharmeṣu viprayuktās<sup>1</sup> teṣā[m ayoni]śa iti / (Bhk 19.1-2)

1) 前注の BP の用語や、注 125 の Sūtrasamuccaya の用語 (Tib: sems pa dang ldan pa, Ch: 心與思惟有所和合) を参考にすれば、この viprayukta は、cittayukta あるいは cittaprayukta とすべきであろう。

[Tib]: tshangs pa zhus pa las kyang bka' sstal te / gang dag bsam gyis mi khyab pa'i chos rnam la sems zhugs pa de dag ni tshul bzhin ma yin pa'o zhes 'byung ngo // (Peking ed. dBu-ma A 69a3)

(121) Tib: lhag par byed pa la zhugs pa. Ch1: 專精業所當造。 Ch2,3: 分別諸法。注 125 の Sūtrasamuccaya には一部欠落部分が見られるが、Tib の lhag byed pa に相当する箇所を漢訳は「差別所行」としている。和訳は lhag par byed pa あるいは lhag byed pa の原語を adhikāra (あることを目標とすること、課題とすること、指示すること) と想定して訳している。adhikāra の語義については長尾 [1982]113-116 頁(注3) 参照。なお、adhi/kr̥ に対応する訳語として lhag par byed pa を用いた例に、『仏所行讚』がある。

うな人たちは、目標に懸命になっている<sup>(122)</sup> のです。目標に懸命な人たちは、[法を] 目標としようとしている限り、正しくないのです」

[ジャーリニープラバが] 言う。

「ブラフマー神よ、諸法の規則 (\*dharmanaya)<sup>(123)</sup> とはどのようなものでしょうか」

[ヴィシエーシャチンティンが] 言う。

「良家の子よ、究極において、自らの対象から離れ<sup>(124)</sup>、欲望を離れているのが、諸法の規則です」…<sup>(125)</sup>

---

「ああ、怒りなきお方よ、暗黒は憤怒そのものを指示しています」*tāmisram iti cākrodha krodham evādhikurvate /* (Tib: *mun las gyur pa khro nyid du / lhag par byed pa'o khro med kye /*) (*Bc* ch.12 v.36 ab)

(122) Tib: *lhag par byed pa la brtson pa*. Ch1: 斯在慢橋 Ch2,3: 入増上慢. *adhikāra* と *abhimāna* (増上慢) の関係については、『善勇猛般若經』に次のような例がある。

「高慢というのは、長老アーナンダよ、[なにかを] 目標とする[というような] 本来ないものがあるものと考えること(目標の虚構の設定)を示すことばである。高慢に関して行動するものは、[本来存在しない高慢を設定してそれをなくすことを] 目標とする[という] 虚構の設定において行動しているのであり、彼らに平等な行動というものはないのである」*adhimāna ityāyusmann ānandādhikārasamāropasyaitad adhvacanam ; ye 'dhimāne caranti, adhikārasamārope te caranti, na te samacāriṇaḥ*. (*Su* 21.20-22)

(123) Tib: *chos rnam kyī tshul*. Ch1: 諸法有所觀察. Ch2,3: 諸法正性.

『入楞伽經』は、*dharmanaya* (Tib: *chos tshul*) に *deśanānaya* (Tib: *bstan p'i tshul*) と *siddhānta-pratyavasthānanaya* (Tib: *grub pa'i mtha' so sor bzhaḡ pa'i tshul*) の二種 (*dviprakāra*) があるとし、後者について次のように説明する。

この中、マハーマティよ、究極の規則とはなにかといえば、それによってヨーガを行う者が自らの心に現われるものについての分別を離れるようになるもの、すなわち、一と異と俱と非俱の主張におちいらず、心と意と意識とを超え、自内証の聖なる境地であり、理由や証明や見解の相からはなれ、無と有の二辺におちいった外教と声聞と独覚の乘に属する一切の邪悪の究理論者が味わうことのないもの、それを、わたしは究極[の規則]であると語る。(安井[1976] 156 頁による)

*tatra siddhāntanayaḥ punar mahāmate katamaḥ / yena yoginaḥ svacittadṛṣyavikalpavyāvṛttim kurvanti yad uta ekatvānyatvobhayatvānubhayatvapakṣāpatanātācittamanomanovijñānātītaḥ svapratyayātmāryagatigocaram hetuyuktidṛṣṭilakṣaṇavinivṛttam anālīdham sarvakutārkikais tīrthakaraśrāvakaḥ pratyekabuddhayānikair nāstyastitvāntadvayapatitaiḥ, tam ahaḥ siddhānta itī vadāmi /* (*Lanik* 70.13-17).

(124) Tib: *rang gi yul dben pa* ( Skt: *svaīṣayavivikta* ). Ch1: 己性寂然. Ch2. 3: 離自性.

(125) [引用] 『大乘宝要義論』 (*Sūtrasamuccaya*)

Tib: *tshangs pa khyad par sems kyis zhus pa'i mdo las / dra ba can gyi 'od [kyis smras pa /*

[ジャーリニープラバが] 言う。

「ブラフマー神よ、この諸法の規則を理解する人は、ほんの僅かしかいないでしょう」

[ヴィシェーシャチンティンが] 言う。

「良家の子よ、離欲の究極というものは一でもありませんし、また多でもありません。ジャーリニープラバよ、良家の息子であれ娘であれ、この諸法の規則を理解 (\*anugama) した人、理解する人、また理解するであろう人は、いかなる法も知ることはなかったし、知らないし、また知ることにはないでしょう。なぜかといえば、『理解することがないときこそ一切知者であると言われる』と世尊が仰せになられている<sup>(126)</sup>からです。もし、正しくこの法の教説を聞いて信解する人がいれば、そういう人たちこそ聞いたとおりに修行する人です。彼らはいかなる法に関しても言葉による詳細な説明(戯論)をおこなう (\*prapañcayati) ことはないでしょう<sup>(127)</sup>。いかなる法に関しても言葉による詳細な説明をおこなうことのない人は、いかなる法も理解することにはないでしょう。いかなる [P 34a] 法も理解することのない人は、輪廻におもむくことはないし、涅槃の属性 (\*nirvāṇadharmā) をもつこともありません。なぜかといえば、世尊は、輪廻を認識の対象にすることもないし、完全な涅槃 (\*prinirvāṇa) も認識の対象にすることもないからで

tshangs pa]<sup>1</sup> chos thams cad ni tshul bzhin no // chos thams cad ni tshul bzhin ma yin pa'o // **smras pa** / tshangs pa chos thams cad ni tshul bzhin / chos thams cad ni tshul bzhin ma yin pa zhes bya ba de ji lta bu / **smras pa** / bsam du med pas ni chos thams cad tshul bzhin no // gang bsam du med 'i chos rnams la sems pa dang ldan pa de dag ni tshul bzhin ma yin pa'o // chos thams cad dben pa'i mtshan nyid 'di ni tshul bzhin no // gang dben pa la [ma mos pa de dag ni lhag par byed pa la zhugs pa'o // gang lhag par byed pa la zhugs pa de dag ni]<sup>2</sup> **mngon par mi brtson pa**<sup>3</sup> de dag ni / lhag byed pa la brtson pa'o // gang lhag byed pa la brtson pa de dag ji srid du lhag par byed pa de srid du tshul bzhin ma yin no // **smras pa** / tshangs pa chos rnams kyi rgyu gang yin / **smras pa** / rigs kyi bu rang gi yul dben pa 'dod chags dang bral ba'i mtha' ni chos rnams kyi rgyu yin no // zhes 'byung ngo // ( SS Peking ed. Sems-tsam A 234a5-b1)

1) To be deleted. 2) [ ] 部分は BP の Tib によって補充, SS では以下の漢訳 ([\*] の部分) も含めて欠落が見られる。3) Ch の「有所和合」に相当する。前後の文脈から見ても否定辞 (mi) は不要であろう。その場合、下線部の前後は「遠離に懸命に努力する (\*abhiyoga) ものたちは、[遠離という] 目標に努力している」の意になる。

[Ch]: 勝思惟梵天所問経云。梵天問光網菩薩言。一切法深固邪, 一切法非深固邪。菩薩言。如汝, 梵天, 復云何説, 一切法是深固非深固邪。梵天言。若非思惟即一切法深固。若心與思惟有所和合即非深固。又一切法離相此即深固。若復離中 [\*] 有所和合此即是爲差別所行。若差別中有所行者, 即諸所作皆非深固。菩薩言。若爾者云何諸法而可生乎。梵天言。善男子, 若自境界離清淨實際中諸法乃生。( Taisho vol.32 68c15-24 )

(126) Tib: khong du chud pa med par bcom ldan 'das kyis kun shes pa lung bstan pa gsungs so. Ch1:大哀世尊不有云乎。Ch2, 3:佛説無得無分別名爲所作已辦相。

(127) Tib: de dag ni chos gang la yang spros par mi byed par 'gyur ro. Ch1:終不復歸於土地處所有所獲致。Ch2:不從一地至一地。Ch3:彼人不戲諸法。

す<sup>(128)</sup>」

〔ジャーリニープラバが〕言う。

「世尊は、〔人々が〕輪廻を超越するようにと法をお説きになるのではないですか」

〔ヴィシェーシャチンティンが〕言う。

「世尊は、〔それを聞くことによって〕輪廻を超越できるような、そのような法を説いたりなさらないのではないですか」

〔ジャーリニープラバが〕言う。

「そのようなことはなさいません」

〔ヴィシェーシャチンティンが〕言う。

「良家の子よ、それゆえ世尊は、〔人々に〕輪廻を滅したり涅槃を獲得したりさせることはせず、輪廻と涅槃の二つの想を超越することをお説きになるのです。その場合、輪廻を超越したり完全な涅槃を獲得したりする人は誰もいません。なぜかといえば、〔諸法の〕平等性 (\**samatā*) というものは、輪廻することも涅槃することもなし、汚されることも清められることもないからです」

そのとき世尊はブラフマー神であるヴィシェーシャチンティンに賛辞を与えられた。

「ブラフマー神よ、素晴らしい、素晴らしい。ブラフマー神よ、もし〔法を〕説かなければならないときには、そのように説くべきである」

この正しい法の教説が説かれたとき、二千の比丘たちは煩惱の汚れから自由になって心は解脱した。

### (III-3)

そのとき世尊は、ブラフマー神であるヴィシェーシャチンティンに対して次のように仰せになられた。

「<sup>(129)</sup>… <sup>(130)</sup>… ブラフマー神よ、私は輪廻も涅槃も認識の対象とすることはしない。…<sup>(129)</sup> なぜかといえば、<sup>(131)</sup>… 如来は輪廻ということを〔言葉によって〕仮に説く (\**prajñāpayati*) が、その場合、輪廻する者は誰もいないからである。涅槃ということを説くが、その場合、完全に涅槃

(128) Ch1: 世尊所了無有生死亦無泥洹。Ch2, 3: 諸佛不得生死不得涅槃。

(129) [引用] 『攝大乘論』 (*Mahāyānasamgraha*)

**Tib**: ( bcom ldan 'das kyis ci la dgongs te / ) tshangs pas zhus pa las de bzhin gshegs pas 'khor ba yang ma dmigs / nya ngan las 'das pa yang ma dmigs ( zhes bstan zhe na / ) (*MSg* APPENDIX 70.3-4. )

**Ch1**: (世尊依何密意) 於梵問經中說。如來不得生死不得涅槃。(玄奘訳「攝大乘論本」)

**Ch2**: (世尊依何義故) 於梵天問經中說。如來不見生死不見涅槃。(笈多共行矩等訳「攝大乘論」)

**Ch3**: 婆羅門問經中言。(世尊依何義如此言。) 如來不見生死不見涅槃。(真諦訳「攝大乘論」)

**Ch4**: (有何義故) 於梵王經中說。我不見世間不證涅槃。(佛陀扇多訳「攝大乘論」) (*MSg* 43)

する者は誰もいない。…(130) …(131) ブラフマー神よ、この正しい道理<sup>(132)</sup>に入る者は、輪廻の属性をもつことはないし、完全な涅槃の属性をもつこともない」

(130) [引用]

A 『大乘掌珍論』

[Ch]: (又言.) 如來不見生死及以涅槃. 言涅槃者如來假立, 此中都無涅槃自性. (乃至廣說.) (Taisho vol.30 274a26-27) \*引用というより取意と見るべきもの.

B 『般若灯論』 (*Prajñāpradīpa*)

[Tib]: de bzhin du ( AVP : 'phags pa tshangs pas zhus pa'i mdo las ) tshangs pa ngas 'khor ba yang ma dmigs / mya ngan las 'das pa yang ma dmigs so // de ci'i phyir zhe na / de bzhin gshegs pas 'khor ba 'dogs par mdzad kyang / der 'ga' yang 'khor bar mi 'gyur zhing de bzhin gshegs pas mya ngan las 'das pa 'dogs par mdzad kyang / der 'ga' yang mya ngan las 'das par<sup>1</sup> mi 'gyur ba'i phyir ro // (*Pra* Peking ed. dBu-ma Tsha 175b7-176a1 ; AVP Peking ed. dBu-ma Zha 298b5-7) 1) AVP : 'da' bar.

[Ch1]: 引用無し.

C 『般若灯論』 (*Prajñāpradīpa*)

[Tib]: de bzhin du ( AVP : 'phags pa tshangs pas zhus pa'i mdo las ) tshangs pa ngas 'khor ba yang mi dmigs<sup>1</sup> mya ngan las 'das pa yang ma dmigs so // de ci'i phyir zhe na / de bzhin gshegs pas 'khor ba 'dogs par mdzad kyang der 'ga' yang 'khor bar mi 'gyur la / de bzhin gshegs pas mya ngan las 'das pa 'dogs par mdzad kyang der 'ga' yang mya ngan las 'da' bar mi 'gyur ba'i phyir ro // ( zhes bya ba la sogs pa gsungs pa ... ) (*Pra* Peking ed. dBu-ma Tsha 211b3-5 ; AVP Peking ed. dBu-ma Za 19ab4-6) 1) AVP adds: so //.

[Ch1]: 又如梵王所問經說. 佛言. 梵王, 我不得生死不得涅槃. 何以故. 言生死者但是如來假施設故, 而無一人於中流轉. 說涅槃者亦假施設而, 無一人般涅槃者. ( Taisho vol.30 98c19-22 )

(131) [引用] 『般若灯論』 (*Prajñāpradīpa*)

[Tib]: de ltar bcom ldan 'das kyis kyang / ( AVP : 'phags pa tshangs pas zhus pa'i mdo las ) de bzhin gshegs pas<sup>1</sup> 'khor ba 'dogs par mdzad kyang<sup>2</sup> der yang 'ga' yang 'khor ba med la / de bzhin gshegs pas<sup>1</sup> mya ngan las 'das pa 'dogs par mdzad kyang<sup>2</sup> der 'ga' yang mya ngan las 'da' ma med do // ( zhes ji skad gsungs pa lta bu'o // ) (*Pra* Peking ed. dBu-ma Tsha 202a6-8 ; AVP Peking ed. dBu-ma Zha 384b5-7) 1) AVP adds: kun rdzob. 2) AVP adds : don dam par.

[Ch1]: 如來所說, 有生死者但假施設而無於中實流轉者. 涅槃亦爾, 但假施設而無於中般涅槃者. ( Taisho vol.30 95c17-19 )

(132) Tib: tshul (Skt: naya). Ch1: 議. Ch2, 3: 法門.

## (III-4)

そのとき、その集会のなかから五百人の比丘が、この教説を聞いて [P 34b] 座から立って出て行ってしまった<sup>(133)</sup>。

〔彼らは〕次のような言葉を口にした。

「もしここにおいて、誰も輪廻することなく、また、完全に涅槃することもないのであれば、我々が、清らかな生活（梵行 \*brahmacaryā）続けてきたことも無駄なこと（\*anartha）であった。ましてや、我々が道の修習、禅定、三昧、等至〔などの修行を続けてきたこと〕は無駄であったのだ<sup>(134)</sup>」

## (III-5)

そのとき、法王子であるジャーリニープラバは世尊にこう申しあげた。

「<sup>(140)</sup>… 世尊よ、なんらかの法において生とか滅とかを求める人たちがいるとしたら、そのような人たちのところに仏が現れること (buddhotpāda) はありません。世尊よ、涅槃を実体として求める人たちには、輪廻の超越などありません。それはなぜかと申しますと、<sup>(136)</sup>… 世尊よ、涅槃と呼ばれているものは、あらゆる特徴 (nimitta) が尽きており、あらゆる動揺 (iñjita) が存在しなくなっている<sup>(135)</sup>のであって…<sup>(136)</sup>、世尊よ、これらの愚かな者たちは、善く語られた法の導き (svākhyātadharmavinaya) において出家してのち、異教徒の見解（外道邪見）に落ち込んで、世尊よ、あたかもゴマからゴマ油をミルクからバターを求めるように、涅槃を実体として求めているのです。<sup>(137)</sup>… すべての法は完全に滅している (atyantaparinirvṛta) のに、<sup>(138)</sup>… 涅槃を実体として求める人を、思い上がった異教徒（の弟子）だと私は、呼びます。…<sup>(137)</sup>」

(133) 大乘經典に見られる「会座から退出する五百比丘」のエピソードに関しては、五島 [1986] 参照。

(134) Ch1:安成慧耶。Ch2:我等何用修道求智慧爲。Ch3:爲何義故修行正道諸禪三昧三摩跋提。

(135) Ch1:亦不汲汲於諸通慧爲殊異也。Ch2:遠離一切動念戲論。Ch3: 遠離一切動一切我想一切發一切戲故。

(136) [引用]

A 『順中論』

Ch: (復有經中說言。) 世尊, 言涅槃者名爲寂靜, 無一切相, 無一切念。(Taisho vol.30 45a2-4)

B 『大乘寶要義論』 (Sūtrasamuccaya)

Tib: 'phags pa tshangs pas zhus pa las kyang / bcom ldan 'das yongs su mya ngan las 'das pa zhes bya ba ni / gang mtshan ma thams cad rab tu zhi ba dang / g'yo ba thams cad dang bral ba'o ( zhes gsungs so ) // ( SS Peking ed. Sems-tsam A 221a1-2)

Ch: 梵王問經云。梵王白佛言。世尊, 諸出家者於隨所樂一切相中若能止息。此說是爲涅槃。(Taisho vol.32 64b15-17)

(137) [引用] 『順中論』

Ch: (又復經中說言。) 世尊, 若有沙門諸法本性寂滅相中求涅槃體, 我說彼人名爲外道。(Taisho vol.30 46a14-15)

…(138) 世尊よ, (139)… 正しく修行をしたヨーガの実践者 (yogācāra) は, いかなる法に関しても, [その] 生起や消滅を見ることはありません。また, いかなる法に関しても, [その] 獲得や証得 (abhisamaya) を求めることはありません …(139) …(140)』

(138) [引用] 『大乘掌珍論』

[Ch]: (故世尊言.) 諸有尋求涅槃有性. 我説癡人外道弟子. (乃至廣説.) (Taisho vol.30 274a25-26)

(139) [引用] 『瑜伽師地論積』

[Ch]: 如大梵問契經等説. 諸瑜伽師觀無少法可令其生及可令滅. 亦無少法欲令證得及欲現觀.(Taisho vol.30 884a4-6)

(140) [引用]

A 『プラサンナパダー』 (*Prasannapadā*)

[Skt]: na teṣāṃ bhagavan buddhotpādo ye kasyacid dharmasyotpādaṃ vā nirodhaṃ vecchanti / na teṣāṃ bhagavan saṃsārasamatikramo ye nirvāṇaṃ bhāvataḥ paryeṣante / tat kasya hetoḥ / nirvāṇaṃ iti bhagavan yaḥ prasamaḥ sarvanimittānāṃ uparatiḥ sarveṅjītanām<sup>1</sup> / tad ime bhagavan mohapuruṣā [ye] svākhyāte dharmavinaye pravrajya tīrthikadṛṣṭau nipatitā nirvāṇaṃ bhāvataḥ paryeṣante / tadyathā tilebhyas tailaṃ kṣīrāt sarpiḥ / atyantaparinirvṛteṣu bhagavan sarvadharmeṣu ye nirvāṇaṃ mārganti tān aham ābhimānikān tīrthikān iti vadāmi / na bhagavan yogācāraḥ samyakpratipannaḥ kasyacid dharmasyotpadaṃ vā nirodhaṃ vā karoti / nāpi kasyacid dharmasya prāptim icchati nābhisamayam iti vistaraḥ // ( *Pp* 540.10-541.5 )

1) Text: sarveṅjītasammiṅjītanām (Mss: sarvejita anijitānām). 以下に挙げた Tib は, rnam par rtog pa thams cad 'gags pa lags na としており, これは, de la Vallée Poussin が注6で挙げているように, Skt: uparatiḥ sarvavikalpānām を示唆する, しかし, *BP* : g'yo ba thams cad ma mchis par gyur pa lags na, *SS* : g'yo ba thams cad dang bral ba'o, *Ppr* : g'yo ba thams cad nye bar zhi ba などの例をみると, 原語は uparatiḥ sarveṅjītanām であったと想定される。

[Tib]: bcom ldan 'das gang dag chos 'ga' zhiḡ skye ba'am 'gag par ' tshal ba de dag la ni sangs rgyas 'byung ba ma lags so // bcom ldan 'das gang dag 'khor ba dngos por 'tshal ba de dag ni / 'khor ba las 'da' ba ma laga so // de ci'i slad du zhe na / bcom ldan 'das mya ngan las 'das pa zhes bgyi ba ni / gang mtshan ma thams cad rab tu zhi ba / rnam par rtog pa thams cad 'gags pa lags na / bcom ldan 'das skyes bu blun po legs par gsungs pa'i chos 'dul ba la rab tu byung nas / mu stegs kyi lta bar ltung ba de dag ni / 'di lta ste / til las til mar dang / 'o ma las mar gsar ltar mya ngan las 'das pa dngos po las tshol bar bgyid do // bcom ldan 'das gang dag chos thams cad shin tu mya ngan las 'das pa la / mya ngan las 'das pa 'tshol ba mngon pa'i nga rgyal can de dag ni / mu stegs can yin no zhes kho bo gleng ste / bcom ldan 'das rnal 'byol spyod pa yang dag par zhugs pa ni / chos gang yang skye ba'am 'gag par mi bgyid la / chos gang yang 'thob pa dang / mngon par rtogs par mi 'tshal lo // (sDe dge ed. dBu-ma 'A 182a1-5 )

## (III-6)

そのとき、法王子であるジャーリニープラバは、ブラフマー神であるヴィシェーシャチンティンにこう言った。

「ブラフマー神よ、この集会において座から立って出ていってしまったこれら五百人の比丘たちが、なんとか<sup>(141)</sup> [この] 法の導き (法門\*dharmavinaya) に入り、信解し、その間違った見

B 『般若灯論』 (*Prajñāpradīpa*)

[Tib]: de bzhin du / ( AVP : 'phags pa tshangs pas zhus pa'i mdo las / ) bcom ldan 'das gang dag chos 'ga' zhig skye ba'am / 'gag par 'tshal ba de dag la sangs rgyas 'byung ba ma mchis so // bcom ldan 'das gang dag mya ngan las 'das pa dngos po las yongs su tshol<sup>1</sup> bar bgyid pa de dag la 'khor ba las yang dag par 'da' ba ma mchis so // de ci'i slad du zhe na / bcom ldan 'das mtshan ma thams cad rab tu zhi ba dang / g'yo ba thams cad nye bar zhi ba gang lags pa de mya ngan las 'das pa lags pa'i slad du'o // bcom ldan 'das mi gti mug can gang dag mya ngan las 'das pa dngos po las yongs su tshol<sup>1</sup> bar bgyid pa de dag ni legs par gsungs pa'i chos 'dul ba 'di la rab tu byung nas mu stegs can gyi lta bar ltung ba lags te / bcom ldan 'das gang dag chos thams cad gtan yongs su mya ngan las 'das pa dag 'di lta ste dper bgyi na til dag las til mar dang / 'o ma dag las mar bzhin du mya ngan las 'das pa yongs su tshol<sup>1</sup> bar bgyid pa de dag ni mu stegs can lhag pa'i nga rgyal can lags par bdag smra'o // bcom ldan 'das rnal 'byor spyod pa<sup>2</sup> yang dag par<sup>3</sup> zhugs pa ni chos 'ga' yang skye ba'am / 'gag par mi bgyid cing chos 'ga' yang thob par mi 'tshal / mngon par rtogs<sup>4</sup> par mi 'tshal lo // (*Pra* Peking ed. dBu-ma Tsha 311b7-312a5 ; AVP Peking ed. dBu-ma Za 360b7-361a5)

1) AVP : 'tshal. 2) AVP adds: dag. 3) AVP omits: par. 4) AVP : rtog.

[Ch1]: 如梵天王所問經 [偈] <sup>1</sup> 言。[實無有涅槃。如來說涅槃。如虛空自結。如虛空自解。] <sup>2</sup> 梵王白佛言。若有分別衆生欲得一切法有起有滅者，佛於其人亦不出世。若於涅槃起分別相言是有體者，然彼衆生決定不能出於生死。世尊，涅槃者其義云何。一切相皆寂滅是爲涅槃。一切所作皆已謝是爲涅槃。世尊。愚癡衆生於佛法中雖得出家，而墮外道見中求涅槃體。如於麻中求油指手言得，何異乳中求覓生酥。若於一切法畢竟寂滅中求涅槃者，乃至邪慢外道中聲聞非佛法中聲聞。若是正見成就行者，不作一法有起有滅，亦不欲得證獲一法，亦不見聖諦理。(Taisho vol.30 131a24-b8)

※2の部分は本来は別の經典の引用。この漢訳のみがBPの偈の引用としている(したがって1の「偈」の語も本来は削除すべきもの)。この偈のSktは以下の通りだが、出典は不明である。

anirvāṇaṃ hi nirvāṇaṃ lokanāthena deśitsm /  
ākāśena kṛto granthir ākāśenaiva mocitaḥ // iti / (*Pp* 540.8-9)

(141) Tib: ci nas kyang. Ch1:知斯等類意之所趣, 何不入法. Ch2:當爲作方便引導其心. Ch3:云何而爲作諸方便引導其心.



解(邪見)から抜け出るように、説いて下さい」[P 35a]

〔ヴィシェーシャチンティンが〕言う。

「良家の子よ、〔どこへでも〕行けばよいでしょう<sup>(142)</sup>。たとえ、ガンジス河の砂(恒河沙)の数ほどの無数の仏国土を越えて行ったとしても、この教えから逃れることはできません。良家の子よ、たとえば生まれつき愚かな人が、虚空をおそれ恐がって逃げだしたとしても、どこからどこに行こうとそれぞれの場所において虚空を見るように、ちょうどそのように、これら〔五百人〕の比丘たちはどんなに遠くへ行こうとも、空・無相・無願の相(\*lakṣaṇa)から離れることはできないのです<sup>(143)</sup>。〔また〕たとえば、別のある人が、『虚空を手に入れよう』と考えて虚空を求めてあちらこちらを走り回ってあらん限りの虚空の名を口にしたとしても、虚空を手に入れることはありません。彼は、ほかならぬその虚空の中を進んでいるのにそれを見ることはないのです。なぜなら、虚空と呼ばれているものは単なる名称にすぎないからです。良家の子よ、ちょうどそれと同じように、これらの比丘たちが涅槃を実体として求め、ほかならぬその涅槃を分析的に考察(\*vicāra)したとしても、それを見ることも知ることもないのです。なぜかといえば、良家の子よ、涅槃と呼ばれているものは単なる名称にすぎないからです。『虚空、虚空』といくら言っても掴むことはできないように、『涅槃、涅槃』といくら口にしても獲得することはできないのです」

### (III-7)

そのとき、彼ら五百人の比丘たちは、この言葉を聞いて、執着を離れ(\*anupādāya)心が煩惱の汚れから解き放たれた(\*āsravebhyaś cittāni vimuktāni)。神通(\*abhijñā)を得た彼らはこう言った。

「世尊よ、すべての法は完全に滅している(\*atyantaparinirvṛta)」のに涅槃を実体として求

(142) LT: 'dong la rag go // 'dong la rag go // . Ph: dong la rag go // dong la rag go // . B: 'dong bar rag go // 'dong bar rag go // . K: 'dong la rag go // gdong la rag go // . P: 'dod la rag go // 'dong la rag go // . CDHN: 'dod la rag go // 'dod la rag go // . 漢訳は対応部分を欠く。 Cf. 「おい、男よ。君は、自由なのだから、好きなところに行きなさい」 gaccha tvam bhoḥ puruṣa yenākāṅkṣasi mukto 'si. (Tib: kye mi khyod gtang gis gar dga' bar 'gro la rag go // ) (SP 105.5, 6-7)

(143) 「虚空を恐れる愚者」の話は『迦葉品』 (§66) にも見られる。

たとえば、虚空を恐れて苦悶する愚かな人が「この虚空を取り除いてくれ」と言う。虚空が取り除かれることなどあり得ないのに、愚かゆえに愚者たちはそのように言う。ちょうどそのように、沙門やバラモンたちの中には、空性を恐れるあまり心を乱すものがある。愚かな彼らは空性を行じている〔ことに思い至らない〕のである。空性はいかなる点においても破壊されることはない。

dper na nam mkhas 'jigs pas nyen pa'i mi // blun po nam mkha' 'di ni sol zhes zer //

nam mkha' bsal bar nus pa ma yin yang // rmongs pas byis pa dag ni de skad smra //

de bzhin dge sbyong bram ze gang dag cig // stong pa nyid kyis skrag cing sems 'khrugs pa //

byis pa de dag stong pa nyid spyod pa // stong pa nyid ni gang du'ang gzhig mi nus // (KP 99.10-17)

める人たちに、仏が現れること (\*buddhaotpāda) はありません。世尊よ、私たちは凡夫ではありません。有学 (\*śaikṣa) でもありません。阿羅漢でもありません。輪廻の属性をもつ者でもありません。涅槃の属性をもつ者でもありません。なぜならば、世尊よ、仏の [P 35b] 出現 (\*buddhaotpāda) というものは、なすことも、考えることも、動揺も、言葉による虚構 (\*prapañca) も、いっさい存在しないことだからです<sup>(144)</sup>。

## (III-8)

そのとき、長老シャーリプトラは、それら〔五百人〕の比丘たちにこう言った。

「長老がたは沙門果 (\*śrāmaṇya) に至りました (\*adhigata)。みずからの目的を達成しました」

彼らが言う。

「尊者 (\*bhadanta) シャーリプトラよ、私たちは〔むしろ〕煩惱 (\*saṃkleśa) に至った (通達した \*adhigata) のです。達成されざるものを達成したのです<sup>(145)</sup>」

シャーリプトラが言う。

「長老がたはどのように考えてそんなことを言うのですか」

彼らが言う。

「尊者シャーリプトラよ、煩惱をよく知る (\*parijñā) から沙門果があるのです。尊者シャーリプトラよ、達成されざるものとは涅槃のことなのです。このように考えて私たちは、煩惱に至った、達成されざるものを達成した、と言ったのです」

シャーリプトラが言う。

「長老がた、その通りです。その通りです。長老がたは供養を受けるにふさわしい人 (福田 \*dakṣiṇīya) の段階にいます<sup>(146)</sup>」

(144) Ch1: 又諸通慧, 我等已離所有道慧, 興諸佛法. Ch2: 佛出世故, 名爲遠離一切動念戲論. Ch3: 以離一切動一切我想一切發一切戲故, 名爲諸佛出世.

(145) Tib: mi bya ba byas so. Ch1: 造於塵勞而無所作. Ch2,3: 不可作而作.

(146) Tib: tshe dang ldan pa rnam ni sbyin gnas kyi sar gnas pa yin no. Ch1: 諸仁所立衆祐之地. Ch2, 3: 汝等今者住於福田能消供養.

世親の『勝思惟梵天所問經論』はこの部分 (Ch3) に「依福田地住羅漢道堪受供養故」という註釈を付けている (Taisho vol.26 346b9-10)。もし、この「堪受」が経文の「消」の語義解釈をしているとすれば、原語として √bhuj (AD: to suffer, endure, experience) が考えられる。この √bhuj に対応するパーリ語は bhujjati であるが、これには、to eat, enjoy を意味する語の他に、to purify, cleanse を意味する語があるという (PED p.506)。このことは、注 73, 147, 150 において写本系 (BKLPHT: sbyong, sbyang) と Ch1 (淨除, 淨, 淨畢) が to purify を指示し、版本系 (CDHNP: spyod, spyad, skt: √bhuj) と Ch2,3 (消) が (「消」が「堪受」の意味だとすれば、の話だが) to endure (あるいは to enjoy) を指示するように見えることと関係があるかも知れない。(注 148 の例もこれに準じて考えるべきであろう。)

なお、漢訳の「消供養」の意味について、以下の3例が参考になると思われるので、資料として列挙しておく。

1 『持世經』: 持世, 若有人如是一切法中得淨智力者, 是爲世間福田。是人次我能消供養。是人能至如來行處。是人能觀如來法。是人不久能證如來智慧。(Taisho vo.14 644a9-11)

彼らが言う。

「尊者シャーリプトラよ、教主であるあの方（世尊）でさえ、布施を浄化する<sup>(147)</sup>ということ  
をなさらないのに、私たちのようなものがどうして浄化する<sup>(148)</sup>ことがありますか」

〔シャーリプトラが〕言う。

「なぜ〔そのようなことを言うの〕ですか」

〔彼らが〕言う。

「尊者シャーリプトラよ、如来は、法界 (\*dharmadhātu) が本質的に全く清浄である  
(\*prakṛtipariśuddha) ことをよくご存じだからです」

### (III-9)

2 『仏藏経』：是人所食一口皆不清浄。唯有向道得道果者能消供養。是人無此。是故名爲不淨食者。(Taisho vol.15 791c8-10)

3 『十誦律』卷56：不消供養者，施與持戒人，持戒人轉與破戒人，是名不消施。與正見人，正見人轉與邪見人，是名不消。若過度用，是名不消供養。(Taisho vol.23 411b3-5)

また、次の3例は「福田」と「清浄」「浄化」との関連を考える上で参考になる。

4 *Mvy* 1113: Mahādakṣiṇāpariśodhakaḥ, Tib: yon yongs su sbyong ba chen po, Ch: 清浄大施主, 消除施障。

5 『迦葉品』 Skt: [スプーティが問う.] あなたがたは、福田の段階に到達したのですか。

sthitā yuṣmākaṃ dākṣiṇeyabhūmau. (*KP* 148)

Tib: khyed kyis sbyin pa'i gnas kyi sa sbyangs sam.

Ch: (漢訳) 卿曹已住羅漢地耶;(晋訳) 諸賢, 清浄福田;(秦訳) 汝等住福田耶;(宋訳) 汝得清浄勝地。

6 『善勇猛般若経』

Skt: スヴィクラーンタヴィクラミンよ、菩薩とは、[太陽のように] この世に高くのぼって、あらゆる衆生の善根を輝かすことに奉仕する者である。あらゆる衆生の敬意の対象となるのである。あらゆる衆生にとって福田の清浄なるものである。あらゆる衆生が慕うにふさわしく、あらゆる衆生が供養するにふさわしく、賞賛するにふさわしい者なのである。

ihābhyudgacchan Suvikrāntavikrāmin bodhisatvaḥ sarvasatvānāṃ kuśalamūlāvabhāsenā pratyupasthito bhavati, sarvasatvānāṃ ca dakṣiṇīyatāṃ gacchati, sarvasatvānāṃ ca puṇyakṣetra- viśuddhiṃ gacchati, sarvasatvānāṃ cābhigamaniyo bhavati, sarvasatvānāṃ ca pūjyo bhavati praśamsanīyaḥ. (*Su* 121.19-23)

Ch: 善勇猛, 若諸菩薩出現世間, 作諸有情善根明照, 與有情類作淨福田。一切有情皆應供養, 一切有情皆應歸趣, 一切有情皆應稱讚。(Taisho vol.7 1108a29-b3)

第4例の漢訳「消除施障」は、「消供養」の「消」の意味を示しているのかも知れない。

<sup>(147)</sup> KLPhT: sbyong. B: sbyang. CDHNP: spyod. Ch1: 不浄. Ch2,3: 不能消.

<sup>(148)</sup> KLPhT: sbyang. CDHN: sbyangs. B: spyang. P: spyad. Ch1: 至清浄. Ch2,3: 能消.

その時、ブラフマー神であるヴィシェーシャチンティンは、世尊にこう申し上げた。

「世間において、誰が供養を受けるにふさわしい者（福田）なのですか」

世尊が仰せになる。

「梵天よ、〔供養を受けるにふさわしい者とは〕世間的なあり方（\*lokadharmā）に心を奪われない<sup>(149)</sup>者たちのことである」

〔梵天が〕言う。「世間において布施を浄化する<sup>(150)</sup>者は誰でしょうか」

〔世尊が〕仰せになる。「いかなる法にも執着しない（\*aparigraha）者たちである」

〔梵天が〕言う。「世間において福田（\* puṇyakṣetra）は誰でしょうか<sup>(151)</sup>」

〔世尊が〕仰せになる。「菩提心を消滅させない者たちである」

〔梵天が〕言う。「善知識は誰でしょうか」

〔世尊が〕仰せになる。「あらゆる人々に対する慈しみの心を捨てない者たちである」 [P 36a]

〔梵天が〕言う。「如来に対してその恩に報いる（\*kṛtājña）のは誰でしょうか」

〔世尊が〕仰せになる。「仏陀の家系（\*buddhavamsā）を断たない者たちである」

〔梵天が〕言う。「如来に対して供養をするのは誰でしょうか」

〔世尊が〕仰せになる。「生ずることのない究極<sup>(152)</sup>を理解する者たちである」

〔梵天が〕言う。「如来に親しくお仕えする（親近）のは誰でしょうか」

〔世尊が〕仰せになる。「〔自らの〕生命に関わるからとして教戒（\*śikṣā）を破ることはしない<sup>(153)</sup>者たちである」

〔梵天が〕言う。「如来に対して恭敬の気持ちを抱くのは誰でしょうか」

〔世尊が〕仰せになる。「感覚器官（六根）をよく制御している者たちである」

〔梵天が〕言う。「世間において大きな財産を持つのは誰でしょうか」

〔世尊が〕仰せになる。「〔信・戒・慚・愧・聞・捨・慧〕七財を持つ者たちである」

〔梵天が〕言う。「世間において知足している<sup>(154)</sup>のは誰でしょうか」

〔世尊が〕仰せになる。「世間において無上の智慧（\*anuttaraprajñā）を持っている者たちである<sup>(155)</sup>」

〔梵天が〕言う。「遠離している（\*vivikta）者とは誰でしょうか」

〔世尊が〕仰せになる。「三界に対して願望を持たない者たちである」

〔梵天が〕言う。「世間においてよく制御された（\*susamvṛta）者は誰でしょうか<sup>(156)</sup>」

(149) Tib: mi 'phrogs pa. Ch1:不爲世法之諸迷惑, 不恥世法. Ch2,3: 不爲世法之所牽者.

(150) BKLPHT: sbyong ba. CDHNP: spyod pa. Ch1:云何淨畢衆祐之事乎 Ch2,3:誰能消供養.

(151) Ch1:誰爲世間之福田乎. Ch2:誰爲世間之福田. Ch3 何者清淨堪爲福田能受供養.

(152) Tib: mi skye ba'i mtha'. Ch1:不起際. Ch2,3:無生際.

(153) Tib: srog gi phyir yang bslab pa mi 'dral ba. Ch1:寧失身命不毀禁戒. Ch2,3:乃至失命因緣不毀禁戒.

(154) Tib: chog 'tshal ba. Ch1:知厭足. Ch2,3:知足.

(155) Ch1:其已速得度世智慧. Ch2:得出世間知慧者. Ch3:得出世間勝般若者.

(156) Ch1:何謂諫諭於世乎. Ch2:誰爲佛言. Ch3:誰爲世間無諸惡行.

- [世尊が] 仰せになる。「あらゆる煩惱 (saṃyojana) をよく滅した<sup>(157)</sup>者たちである」  
 [梵天が] 言う。「世間において幸福 (\*sukha) なのは誰でしょうか」  
 [世尊が] 仰せになる。「執着 (\*parigraha) を持たない者たちである」  
 [梵天が] 言う。「執着がないのは誰ですか」  
 [世尊が] 仰せになる。「[五] 蘊をよく知る者たちである」  
 [梵天が] 言う。「彼岸にいる<sup>(158)</sup>のは誰でしょうか」  
 [世尊が] 仰せになる。「六つの知覚領域 (六処) を捨てている者たちである」  
 [梵天が] 言う。「世尊よ、[向こう] 岸に渡っている<sup>(159)</sup>のは誰でしょうか」  
 [世尊が] 仰せになる。「梵天よ、平等性 (\*samatā) を獲得した者たちである」  
 [梵天が] 言う。「世尊よ、どのようにしたら菩薩たちの布施は広大なものとなるのでしょうか」  
 [世尊が] 仰せになる。「[菩薩たちから教えを聞いた] すべての人が、一切 [P36b] 知者の心

(157) Tib: shin tu byang ba. Ch1:休息. Ch2,3:能断. 注 68 参照.

(158) Tib. pha rol tu mchis pa (Skt: pāraga, pāragata). Ch1:離於陰蓋. Ch2:度欲河. Ch3:能到彼岸. AD : pāraga, one who has gone to the end of, one who has completely mastered anything, completely familiar or conversant with ( with gen. or in comp.). Cf. SR :

スガタであり、人中の牛王のごとき人であり、福德の絶頂・彼岸に至った人であり、あらゆるすぐれた福德の彼岸に至った人の、これらの福德は計り知れない。あなた方は仏陀という福田に頂礼しなさい。

imi guṇa sugatasya aprameyā naravṛṣabhasya guṇāgrapāragasya /  
 sarvaṅguṇaviśeṣapāragasya śirasi namasyatha buddhapuṇyakṣetram // ( ch.10 v.90)

(159) Tib: 'gram du phyin pa. Ch1:已過. Ch2:住彼岸. Ch3:能住彼岸. 『迦葉品』(KP §154) に次のような例がある。

Skt: 来たれ、来たれ。偉大なる法の船に来たれ。[その]偉大な法の船は、涅槃の町へと導き、安穩な道を進む。こちらの岸の有身見を捨て、向こうの岸へと導く。[ここにはもはや] 卑しきすべての邪見は存在しない。

āgacchatāgacchatābhiru<ha>ta mahādharmānāvam / nirvāṇapuragāminī / kṣemamārgagāminī / mahā[dharmanaur apāri]matīrasatkāyadṛṣṭimjahanī / pārimatīragāminī laghusarvadṛṣṭigatavigatā{ṃ} /

Tib: dam pa'i chos kyi gru chen po mya ngan las 'das pa'i grong khyer du 'gro ba / bde bar 'gro ba / 'jigs pa med par 'gro ba / lam du 'gro ba / 'jig tshogs la lta ba 'dor bar zhugs la tshu rol gyi 'gram nas pha rol gyi 'gram du lta ba thams cad sel ba / gtse ba med pa'i mya ngan las 'das par myur du song shig. (正法の偉大なる船、[それは] 涅槃の町に導き、安樂へと導き、無畏へと導き、[安穩な] 道を進む。有身見を捨てて、こちらの岸から向こうの岸へと、あらゆる邪見を取り除く。[その船に乗って] 災いのない涅槃へと速やかに至れ。)

Ch:(秦訳) 來上法船。從安隱道至於涅槃。度身見岸。至佛道岸。離一切見; (宋訳) (使諸衆生) 來入正法大船。過彼生死四流大河。得到涅槃安樂彼岸。得無所畏永離諸見。

を信解するときである<sup>(160)</sup>」

〔梵天が〕言う。「どのようにしたら戒を持つ者となりますか」

〔世尊が〕仰せになる。「一切知者の心<sup>(161)</sup>を捨てないときである」

〔梵天が〕言う。「どのようにしたら忍辱を持つ者となりますか」

〔世尊が〕仰せになる。「一切知者の心は尽きることがないと見る者たちである<sup>(162)</sup>」

〔梵天が〕言う。<sup>(164)</sup>…「どのようにしたら精進を持つ者となりますか」

〔世尊が〕仰せになる。「一切知者の心を求めつつもそれを対象とすることはないときである<sup>(163)</sup>」…<sup>(164)</sup>

〔梵天が〕言う。「どのようにしたら禅定を行う者となりますか」

〔世尊が〕仰せになる。「一切知者の心は本性として寂靜であると理解するときである<sup>(165)</sup>」

〔梵天が〕言う。「どのようにしたら智慧を持つ者となりますか」

〔世尊が〕仰せになる。「一切の法に対して詳細な言語的説明（戲論）をしないときである」

〔梵天が〕言う。「どのようにしたら慈に住する者となりますか」

〔世尊が〕仰せになる。「衆生の想（\*sattvasaṃjñā）を起こさないときである」

〔梵天が〕言う。「どのようにしたら悲に住する者となりますか」

〔世尊が〕仰せになる。「あらゆる法の想を起こさないときである」

〔梵天が〕言う。「どのようにしたら喜に住する者となりますか」

〔世尊が〕仰せになる。「私の想を起こさないときである」

〔梵天が〕言う。「どのようにしたら捨に住する者となりますか」

〔世尊が〕仰せになる。「自他の想を起こさないときである」

〔梵天が〕言う。「どのようにしたら信（\*prasāda）に住する者となりますか」

〔世尊が〕仰せになる。「あらゆる法はことばでは表現できない（\*anabhilāpya）ことを信解するときである<sup>(166)</sup>」

〔梵天が〕言う。「どのようにしたら〔多〕聞に住する者となりますか」

(160) Ch1:勸化一切衆生之類入諸通慧心故。Ch2:菩薩能教衆生一切智心。Ch3:菩薩能爲衆生説一切智心故。

(161) Ch1:道心。Ch2,3:菩提之心。

(162) Ch1:見心滅盡故。Ch2:見心相念念滅。Ch3:以見一切智心無盡故。

(163) Ch1:若求於心不得處所故。Ch2:求心不可得。Ch3:觀察一切智心不得故。

(164) [引用]『修習次第・後編』(Bhāvanākrama III)

[Skt]: tatraivoktam / kathaṃ vīryavanto bhavanti / yadā sarvajñatācittaṃ vicīyamānā nopalabhanta iti / (Bhk p.19.10-11)

[Tib]: yang de nyid las / ji ltar na brtson 'grus dang ldan pa lags / bka' stsal pa / gang gi tshe thams cad mkhyen pa'i ye shes la brtags nas ma dmigs pa'o zhes gsungs so // (Peking ed. dBu-ma A 69a6-7. sDe dge ed. sBu-ma Ki 63b6)

(165) Ch1:心休息故。Ch2:能除身心麁相。Ch3:能覺一切智心自性清淨故。

(166) Ch1:不捨諸法清白故。Ch2:信解無濁法。Ch3:信一切法無言語故。

- 〔世尊が〕仰せになる。「あらゆることばに執着しない (\*anabhiniveśa) ときである」
- 〔梵天が〕言う。「どのようにしたら慚 (\*hri) を持つ者<sup>(167)</sup>となりますか」
- 〔世尊が〕仰せになる。「内をよく知ることによってである」
- 〔梵天が〕言う。「どのようにしたら愧 (\*apatrāpya) が完成した者<sup>(168)</sup>となりますか」
- 〔世尊が〕仰せになる。「[P 37a] 外の知覚領域 (\*bāhyāyatana) を捨てることによってである」
- 〔梵天が〕言う。「世尊よ、菩薩たちはどのようにしたら、あらゆる徳を集積して遍行する (\*sarvatraga) 者となるのでしょうか」
- 〔世尊が〕仰せになる。「身体的・言語的・意思的な行為を清浄にする (\*pariśodhana) ことによってである」

## (III-10)

さて、世尊は、このとき、これらの詩を語られた。

- (1) 身体が清浄 (\*viśuddha) で悪事をしない。ことばも清浄 (\*viśuddha) だから常に嘘をうち砕く。意も清浄 (\*śuci) だから常に思い (\*āśaya) に汚れない。それゆえ、彼は、勝者 (仏陀) によって遍行と言われる。
- (2) <sup>(169)</sup>… 不浄を修習して貪 (\*rāga) が無い。慈に住して瞋 (\*dveśa) が無い…<sup>(169)</sup>。清らかな智慧に住して癡 (\*moha) が無い。巧みな人々は、こういう点で遍行であると言われる。
- (3) 彼は、村の中と同じように森の中でも [同じ態度をとる]。森の中や村の中、集会の中において同じであり、彼は威儀を変えることがない。それゆえ、勝者 (仏陀) は彼を遍行と言う。
- (4) あらゆる勝者 (仏陀) の法を彼は信解する。巧みな彼は、その法への執着からも離れている。僧団に対しても無為であると信解する。それゆえ、勝者 (仏陀) は彼を遍行と言う。
- (5) 貪に傾倒している (\*adhimukta) 者たちの行動をよく理解し、瞋に傾倒している者たち、おなじく、癡 [に傾倒している者たちの行動をよく理解し、彼らの] 行動を変えることに彼は巧みである。それゆえ、彼は勝者 (仏陀) によって遍行と言われる。
- (6) 欲界に住することがなく、色界にも住することはない。彼は、無色界にも住さない。[そのような禅定を行じるゆえに]<sup>(170)</sup>それゆえ、彼は勝者 (仏陀) によって遍行と言われる。
- (7) あらゆる存在 (\*bhāva) は、常に特徴 (相) と願い (願) とを欠いており (\*tuccha)、空にほかならない、と信解する。同時に、もろもろの煩惱 (\*āsrava) を滅することはしない。それゆえ、彼は勝者 (仏陀) によって遍行と説かれる。

(167) Tib: ngo tsha 'tshal ba dang ldan pa.

(168) Tib: khrel mchis pa phun sum tshogs pa.

(169) Ch1: 遵修慈行, 不猗染塵, 專於哀行, 無有患害. Ch2: 行慈無貪著, 觀不淨無患. Ch3: 觀不淨無貪, 行慈無瞋患.

(170) Ch2,3: 行如是禪定.

- (8) 彼は、[P 37b] 独覚乗に巧みな者である。〔教えの〕声に従って声聞となる人（声聞乗）のことも彼は理解している<sup>(171)</sup>。完全な仏乗の究極に達している。それゆえ、善逝（仏陀）によって遍行と言われる。
- (9) 彼らは、常にあらゆる点で、考え（\*mati）が清浄である。彼らは正（\*naya）と非正（\*anaya）に混乱する（\*mūḍha）ことがない。愛しいもの（\*priya）と愛しくないもの（\*apriya）に対して平等な心を持つ。それゆえ、遍行の菩薩である。
- (10) 過去の法を分別することはない。未来・現在〔の法〕に関しても同様である。勇者（菩薩）はあらゆることに関して分別しない。それゆえ、清浄なる人は、遍行である。

<一次文献・略号>（校訂テキストまたは西藏大蔵経，大正大蔵経）

- AKBh* *Abhidharmakośabhāṣya* of Vasubandhu, P. Pradhan (ed.), revised second edition with introduction and indices by A. Haldar, Patna, 1975.
- AKVy* *Abhidharmakośavyākhyā : Abhidharmakośa & Bhāṣya of Ācārya Vasubandhu with Sphuṭārthā Commentary of Ācārya Yaśomitra*, Part I-IV, Critically edited by Swami Dwarikadas Shastri, Varanasi, 1971.
- Asp* *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*, Edited by P. L. Vaidya, Buddhist Sanskrit Texts(BST) No.4, Darbhanga, 1960.
- AVP* *Avalokītavratā's Prajñāpradīpāṭikā*, Tib: *Shes rab sgron ma rgya cher 'grel pa*, Otani No.5259, Tohoku No.3859.
- Bc* *Buddhacarita : Or, Acts of the Buddha, Complete Sanskrit Text with English Translation*, by E. H. Johnston, Labore, 1936; reprint Delhi,1972.
- Bcvp* *Bodhicaryāvatāra Pañjikā : Bodhicaryāvatāra of Śāntideva with the Commentary Pañjikā of Prajñākaramati*, Edited by P. L. Vaidya, BST No.12, Darbhanga, 1960.
- Bhk* *Bhāvanākrama : Minor Buddhist Texts Part III Third Bhāvanākrama*, Gieseppe Tucci(ed.). Serie Orientale Roma XLIII, Roma, 1971.

(171) Tib: sgra phyir 'brang ba nyan thos 'gyur ba'ang de yis shes. 『梵天所問経』第3章に次のような一節がある。  
 [シャーリプトラが] 言う。「ジャーリニューブラバよ、声聞は声に従う者であり、自らの〔心〕相續を輝かすことを特徴としています。わずかな知によって解脱を得る者たちの智慧です。そういう智慧によって私は『智慧ある者の中で最高だ』と言われたのであって、菩薩の智慧によって〔そう言われたわけ〕ではありません」  
 dra ba can gyi 'od gang nyan thos sgra'i rjes su 'brang ba / rang gyi rgyud snang ba'i mtshan nyid /  
 nyi tshe ba'i ye shes kyis rnam par grol ba rnam kyis shes rab ste / shes rab des bdag shes rab dang  
 ldan pa rnam kyis mchog tu gsungs kyis byang chub sems dpa'i shes rab kyis ni mi ma yin no // (BP  
 P 52b6-7)



- Bodhis* *Bodhisattvabhūmi*, U. Wogihara (ed.), Tokyo, 1930-36.
- BP* *Brahmaviśeṣacintipariṣcchā*.
- KP* *Kāśyapaparivarta*, A. von Staël-Holstein (ed.), Shanghai, 1934.
- Krp* *Karuṇāpūṇḍarīka*, Edited with Introduction and Notes by Isshi Yamada, Vol.II, London, 1968.
- Larik* *Saddharmalaṅkāvatārasūtram*, Edited by P. L. Vaidya, BST No.3, Darbhanga, 1963.
- LV* *Lalitavistara*, Edited by P. L. Vaidya, BST No.1, Darbhanga, 1958.
- MSA* *Mahāyānasūtrālaṅkāra*, Edited by Sylvain Lévi, Tome I, Texte, Paris, 1907.
- MSg* *Mahāyānasamgraha* : 佐々木月樵『漢譯四本對照・攝大乘論・附西藏譯攝大乘論』改訂新版, 臨川書店, 1977年.
- Pp* *Prasannapadā : Madhyamakavṛttiḥ. Mūlamadhyamakakārikās de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti*, par Louis de la Vallée Poussin, St.Pétersburg, 1913.
- Pra* *Prajñāpradīpa*, Tib: dBu ma'i rtsa ba' i 'grel pa shes rab sgron ma, Otani No.5253, Tohoku No.3853, Ch: 『般若燈論釋』 Taisho No.1566.
- Pvsp* *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā*, (I), Edited by N.Dutt, London, 1934; (II-III), Edited by T.Kimura, Tokyo, 1986.
- SP* *Saddharmapūṇḍarīkasūtra*, Kern and Nanjio (eds.), St.Pétersburg, 1912.
- SR* *Samādhirājasūtra*, Edited by P.L.Vaidya, BST No.2, Darbhanga, 1961.
- SS* *Sūtrasamuccaya*, Tib: *mDo kun las bsdus pa*, Otani No.5330, Tohoku No.3934, Ch: 『大乘寶要義論』 Taisho No.1635.
- Su* *Suṅkrāntavikrāmipariṣcchā Prajñāpāramitāsūtra*, by Hikata Ryusho, Fukuoka, 1958 ; reprint, 1983 (臨川書店).

<二次文献・略号> (辞書・索引類)

- AD* *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, by Prin. Vaman Shivaram Apte, Revized & Enlarged Edition, Kyoto, 1978.
- BHSD* *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary, Volume II: Dictionary*, by Franklin Edgerton, New Haven, 1953; reprint Delhi, 1970.

- GDbh*            *Glossary of the Daśabhūmikasūtra*, Compiled by J. Rahder, Paris, 1928.
- IAKBh*           *Index to the Abhidharamakośabhāṣya*, Compiled by Akira Hirakawa, Tokyo, 1978.
- IBcyp*           *An Index to the Bodhicaryāvatāra Pañjikā, Chapter IX*, Compiled by Takashi Hirano, Tokyo, 1966.
- MDP*            *Materials for a Dictionary of the Prajñāpāramitā Literature*, by Edward Conze, Suzuki Research Foundation, Tokyo, 1973.
- Mvy*            *Mahāvvyutpatti*: 『梵藏漢和四譯對校・翻譯名義大集』鈴木學術財団, 1916.
- MW*            *A Sanskrit-English Dictionary*, by Sir Monier Monier-Williams, Oxford, 1899 ; reprint 1982.
- PED*            *The Pali Text Society's Pali-English Dictionary*, Edited by T. W. Rhys Davids and William Stede, London, 1972.
- TCD*            *A Tibetan-Chinese Dictionary*: 『藏漢大辭典』(上・下), 張怡蓀主編, 民族出版社, 1993.
- TED*            *A Tibetan-English Dictionary*, ed. by H.A.Jäschke, London, 1881.

<三次文献> (著作・論文)

- 梶山雄一 [1994]: 『さとりにへの遍歴・華嚴經入法界品 (上)』(監修) 中央公論社.
- 河村孝照 [1993]: 「思益梵天所問經」『新国訳大蔵經 維摩經・思益梵天所問經・首楞嚴三昧經』大蔵出版, 216-370 頁.
- 五島清隆 [1981]: *The Tibetan Text of the Brahmāpariṣcchā* (『チベット訳・梵天所問經』) vol.1, ii+61pp. (私家版)
- [1985]: 『梵天所問經』研究ノート (1)—西蔵大蔵經二写本を中心とした漢・蔵訳間の異同について—『印度學佛教學研究』#34-1,(89)-(93) 頁.
- [1986]: 「提婆達多傳承と大乘經典」『仏教史学研究』#28-2, 51-69 頁
- [1988]: 『梵天所問經』研究ノート (2)—Viśeṣacintin と Jālinīprabha の二菩薩について—『印度學佛教學研究』#36-2, (50)-(55) 頁.
- [1989]: 『梵天所問經』解題『堀内寛仁先生喜寿記念密教文化論集』(非売品) 402-415 頁.
- [1997]: 『梵天所問經』(3)—此岸の肯定と説法への情熱—『印度學佛教學研究』#46-1, (95)-(101) 頁.

- [2001]: 「チベット訳『有徳女所問経』(I)・和訳」『佛教大学仏教学会紀要』# 9, (1)-(43) 頁.
- [2002]: 「チベット訳『有徳女所問経』(II)・校訂テキスト」『仏教大学仏教学会紀要』#10, (1)-(39) 頁.
- [2003]: 「チベット訳テキスト校訂と写本大蔵経—『思益梵天所問経』を中心に—」『印度學佛教學研究』#52-1, (53)-(57) 頁.
- 長尾雅人 [1982]: 『撰大乘論 和訳と注解』講談社.
- [2007]: 『『大乘莊嚴經論』和訳と註解—長尾雅人研究ノート—(2)』長尾文庫.
- 船山徹 [2007]: 「「如是我聞」か「如是我聞一時」か —六朝隋唐の「如是我聞」解釈史への新視角—」『法鼓佛學學報』# 1, pp.241-275.
- 平川彰 [1995]: 「文殊師利法王子と一生補処」『印度哲学仏教学』#10, 1-20 頁.
- 村上真完 [1998]: 「大乘經典の創作 (sūtrāntābhinihāra, 能演諸経, 善説諸経) 『論集』(印度学宗教学会) #25, (1)-(20) 頁.
- 安井廣濟 [1976]: 『梵文和訳 入楞伽経』法蔵館.
- 渡辺章悟 [1981]: 「対告衆としての Satpuruṣa」『東洋大学大学院紀要』#18, (1)-(14) 頁.
- Harrison, Paul[1990]: *The Samādhi of Direct Encounter with the Buddhas of the Present, An Annotated English Translation of the Tibetan Version of the Pratyutpanna-Buddha-Saṃmukhāvasthita-Samādhi-Sūtra*, Studia Philologica Buddhica Monograph Series V, The International Institute for Buddhist Studies, Tokyo.

## An Annotated Japanese Translation of the Tibetan Version of the *Brahmapariṣcchā* (1)

### Summary

Along with the *Prajñāpāramitā* and *Vimalakīrtinirdeśa*, the *Brahmapariṣcchā* is an early Mahāyāna sūtra which expounds the ideas of emptiness (*śūnyatā*) and non-duality (*advaya*). Although the *Vimalakīrtinirdeśa* is better known in China and Japan, the *Brahmapariṣcchā* seems to be more widely read in India. This is indicated, for example, by the fact that it is frequently quoted as a scriptural authority in Mādhyamika treatises such as the *Prajñāpradīpa*, *Prasannapadā* and *Bhāvanākrama* and in Yogācāra treatises such as the *Mahāyānasamgraha* and *Mahāyānasūtrālaṃkāra*.

I completed an MA thesis in 1980, which intensively dealt with the *Brahmapariṣcchā*. Since then I have sporadically published several articles on the Tibetan translation, contents,

and philosophical significance of this text. My ultimate aim is to publish a critical edition of the Tibetan translation based on the five block prints of Tibetan Tripitaka and the five manuscript versions, including the Batang and Phug brag manuscripts. Here I am offering an annotated Japanese translation of the first of the six chapters of the Tibetan version on the basis of an unpublished critical edition that I have prepared.

The sūtra opens with the Buddha emitting rays of light that prompt Brahmā Viśeṣacintin, who lives in another Buddha-realm, to come to our Sahā world. Lauded by the bodhisattva Jālinīprabha as the foremost among all bodhisattvas, he asks the Buddha ten questions about “firm resolve” (*adhyāśaya*), and the Buddha replies to each question in four ways (*catur-dharma*). Then Viśeṣacintin also replies to some of the questions posed by Jālinīprabha. Having listened to their questions and answers, the Buddha summarizes them by saying that neither transmigration nor nirvāṇa is an object of cognition. On hearing this, five hundred monks fall prey to doubts about their past practices and leave the assembly. Jālinīprabha criticizes them as non-Buddhists who seek *nirvāṇa*, as if it were a real entity, in the same way as one might seek sesame oil from sesame seeds, and he asks Viśeṣacintin to try somehow to persuade them to come back. Viśeṣacintin explains to them that *nirvāṇa*, like space, is nothing but a mere designation and that even when one is in its midst one can neither escape from it nor grab it. On hearing this, the five hundred monks attain liberation of the mind and explain to Śāriputra the purity of the field of merit and the purity of the Dharma-realm. Lastly, Viśeṣacintin questions the Buddha about traditional terms such as “field of merit” and other Mahāyāna terms, and after answering his questions, the Buddha states that someone in such a state is an “omnipresent” (*sarvatraga*) bodhisattva, who is then extolled in the closing verses of the first chapter.

<キーワード> 正問, 等分, 四法, 一切知者, 不得生死不得涅槃, 消供養, 遍行